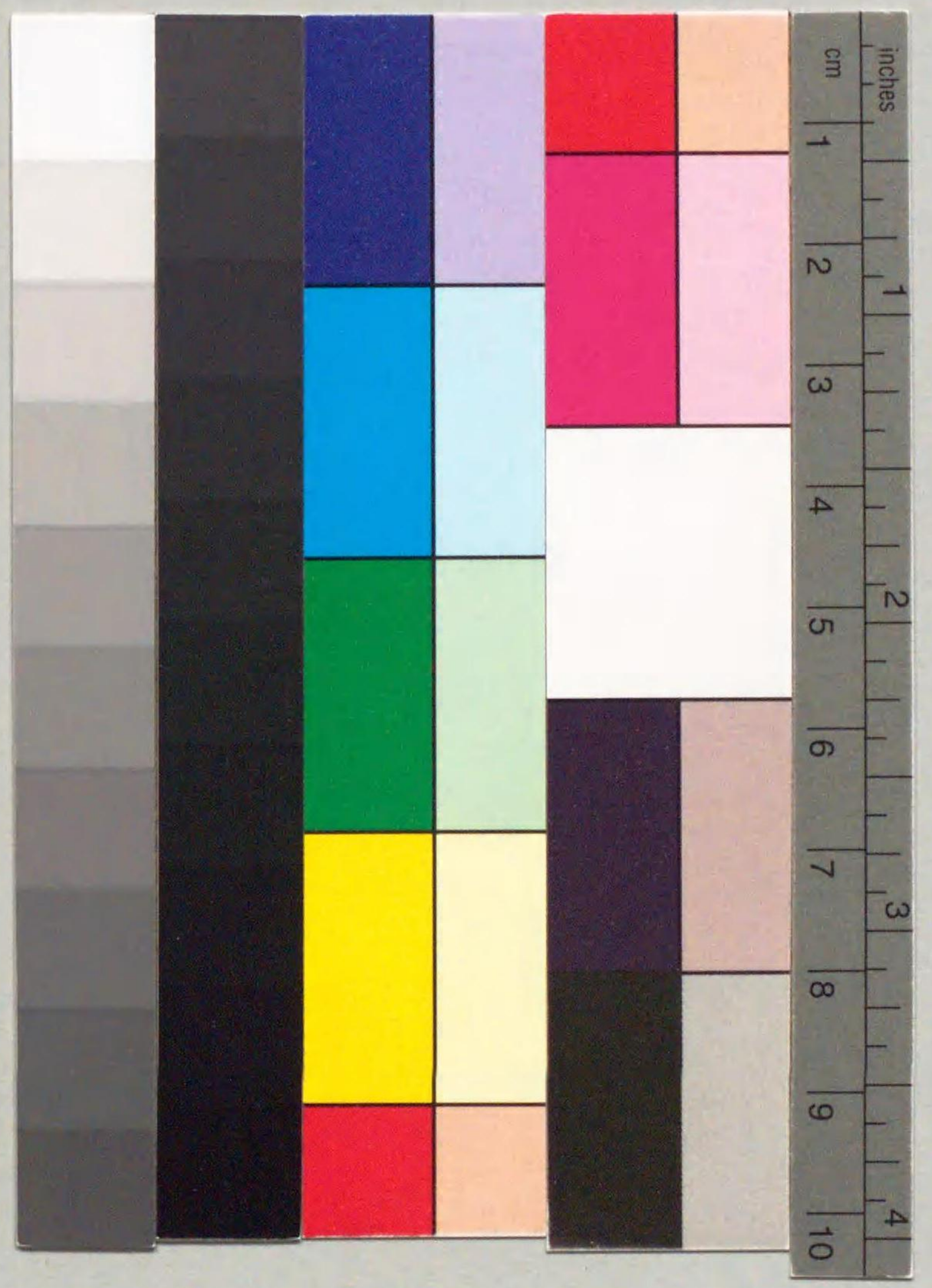


210.61
Ka692k
Y



00337571



10 2 37

拾 版

海舟先生
次川清話
全

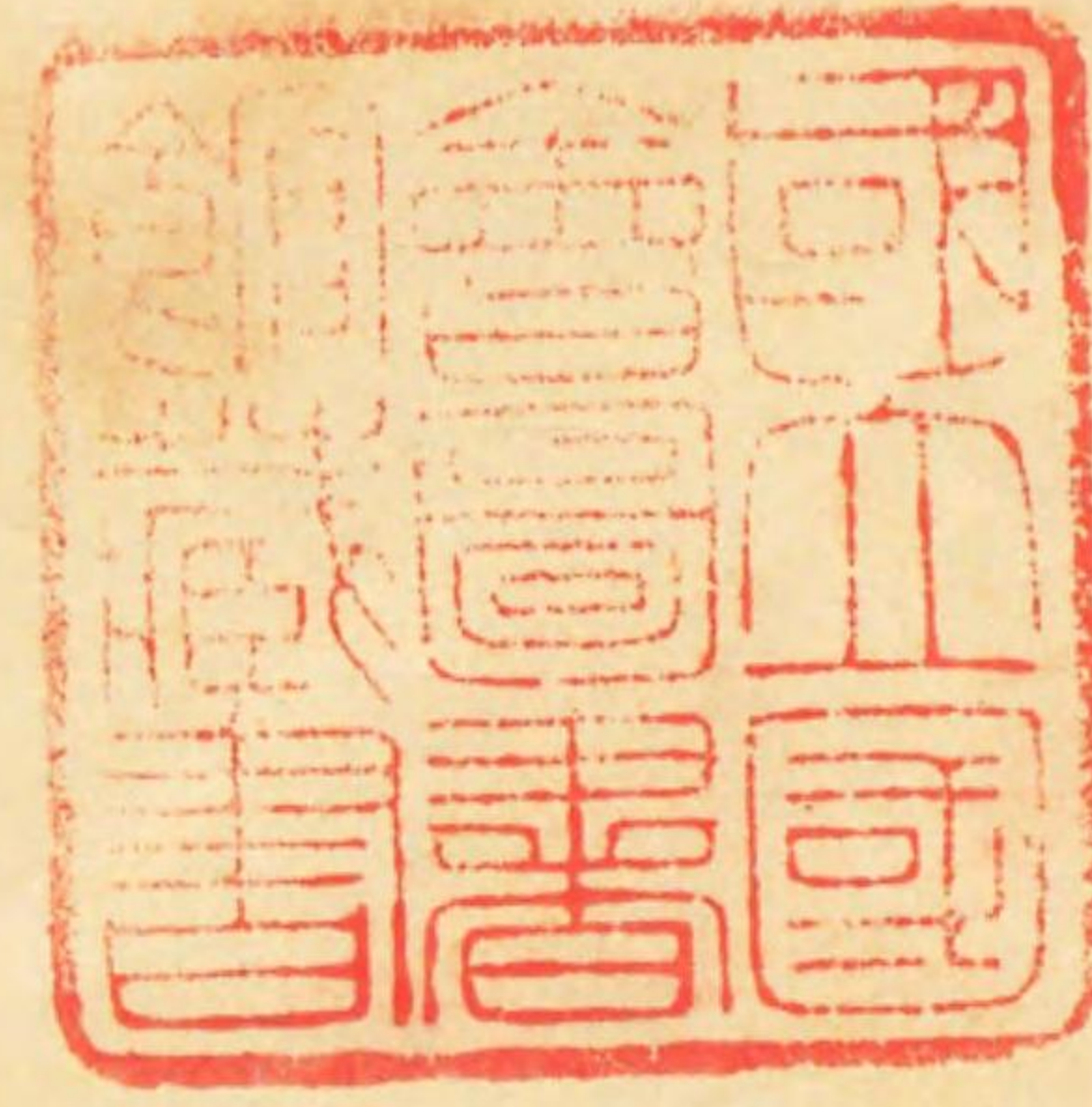


210.6/Ka692 RY



小川一眞製

海舟先生自像



337571

210.61Ka692kY



海舟先生肖像

小川一眞製



337571

達
人
大
觀



海邊國武





達人大觀

汝邊國武



海舟
先生

氷川清話全

吉本襄撰

皇城の西、氷川河畔、幽邃絶塵のところの一邸あり。邸は蒼然として古色を帯び、門前老松枝を垂れて地を掩ふ。門を入ること十數歩、玄關を上り、進みて突き當りの西洋室より左折し、廊下傳ひに一室に入れ、それを隔てて其の奥にまゝ一室あり。廣さ六疊、蒼蔚たる庭樹に對し、清麗淨潔、一點の塵氣を留めず。中に瀟洒たる鶴髮童顔の翁、淡然几に凭りて、白眼一世を睥睨し、來るものは大臣と書生とを問はず、華族と平民とを論ぜず、みなこの室に引きて、高談清話。時の移るを覺えざらしむるもの、これを海舟勝翁とす。

勝翁は、物部氏あり。その先は、石上宅嗣に出で、太郎季時に至り、始めて勝氏と稱す。子孫、今川氏に屬するものありしが、中興の祖、市郎右衛門時直、天正

三年徳川氏に岡崎に奉仕してより代々渝らず、翁に至て四ッ谷大箆筭組五十四人中の一家となり祿、四十一石餘を食む。翁の父を左衛門太郎といひ、夢酔と號す、男谷氏より入りて嗣とある。

男谷氏の出處につきて兩説あり。一は以て武藏川越とし、一は以て越後小千谷と。後説蓋し信すべし。傳へいふ、所謂田沼時代に當りて、越後小千谷村の農家に盲兒あり。年僅に十七八、腰に青錢三百文を纏ひ、有爲の志を抱ひて、遙に江戸に來り、各處に彷徨す。一夜大雪あり。凍えて奥醫師石坂宗哲の門前に倒る。宗哲之を憫れみ、數日其の供部屋に居らしむ。當時賭博盛に行はれ、石坂邸内、亦通宵奇偶の聲を絶たず。盲兒傍にあり、輸者に青錢を貸して利息を収め、數日にして一兩二分の巨額を得たり。宗哲之を奇とし、別に一兩二分を與へて、去りて生業を求めむ。盲兒これより刻苦勉勵、遂に巨萬の富を致えて、江戸に十七ヶ所の地面を有し、水戸家のみへも七十万兩を貸附するに至れり。盲兒は、即ち男谷檢校にして、實翁の曾祖父に當る。

檢校終身絹衣を用ひ、常に綿服を着く、而も一日着れば、復た之を用ひ、貧民と興へて之を賑はせり。死するに臨みて、諸子を枕頭に招き、諸家の借金證書を取りて、悉く火中に投じ、以て之を激勵せりといふ。檢校の第九子を平藏といふ。平藏の第七子は、即ち翁の父、左衛門太郎これなり。

翁、諱は義邦、通稱麟太郎、まゝ安房守と稱し、海舟と號す。然れども維新後は、單に安芳の名を用ふるを常とせり。文政六年正月を以て、本所龜澤町の邸に生る。十六歳の時家督を續ぐ。

安政二年、翁、年三十三にして長崎表海軍傳習所用を命ぜらる。翌年、講武所砲術師範役小任せられ、同六年、海軍操練所教授方頭取と爲り、その年の秋、米國航海を命ぜらる。七年歸朝。文久元年、また講武所砲術師範役となり、二年、軍艦操練所頭取となり、尋いで軍艦奉行並となる。元治元年、更に軍艦奉行とあり、熟舎を兵庫に開きて海軍を教授す。志士來り學ぶもの多し。今の伊東海軍中將の

如きもその一人とす。十一月急御用あり、遽に江戸に歸りしが、慶應二年、また大阪へ召されて、軍艦奉行となり、同四年、海軍奉行、軍事總裁等に歴進す。時に年四十六。

維新前に於ける翁の半生は、かくの如く殆ど海軍の爲めに費されたり。我國海軍の創設につきては、翁の力實に與かりて多きに居れり。

戊辰の役、官軍東征の途に上るや、幕臣或は邀へ戦はんと欲するものあり、江戸の人心恟々たり。然れども將軍固より戰意なきを以て、翁に命じて之に處するの策を講ぜしむ。翁、命を奉じ危難の際に處して動かす。總督宮、駿府に至らせたまふに及び、上野の輪王寺宮、駿府に至り、將軍恭順の狀を陳じて、寛典の所置を請ふ。總督宮、謝罪の實なきを以て、未だ之を許し給はせ。翁また山岡鐵舟等を遣はして之を請ふ。既にして官軍の先鋒品川に至り、將に江戸城に入らんとす。是に於て、翁自から赴きて、參謀西郷隆盛に面し、將軍の旨を縷陳して、百方其の調停に盡力を。隆盛之を容れて、直ちに進撃中止の令を下し、狀を總督の宮に啓す。

之よりて官軍一刃を動かさずして、江戸城に入ることを得、王政復古の大業、平和の間に成就す。翁が絶倫の大手腕は、實にこの時を以て天下に顯はれたり。

明治二年、外務大丞を命ぜられ、即日之を辭す。次いで兵部大丞を命ぜられしも、また直に之を辭せり。全五年、海軍大輔に任ぜられ、從四位に叙せらる。翌年、參議兼海軍卿に任ぜられ、七年、正四位に陞る。全八年、元老院議官に任ぜられ、また直に之を辭し、爾來閑居して、また劇務は執掌せず。二十年、華族に列せられ伯爵を賜ふ。蓋し維新の功によりてなり。尋いで從二位に陞叙せられ、翌二十一年、樞密院顧問官となる。翁、今年既に七十六才の高齡ふ及ぶも、老體なほ頗る健にして、意氣雲霄を凌ぐものあり。

以上を、翁が經歷の一斑となす。若し夫れ翁の人物に至りては、后進余の如き者の、能く品題し得可き所にあらざるを以て、敢て一言も之れに及ばざる也。

余、しばしば翁に親炙して、諄々たる其の高教を聽き、啓發せしもの少からむ。乃ち餘韻の耳底に残れるものを録して『氷川清話』と題し、附するに翁の逸事と詩

歌を以てし、世の翁を欽仰する人士に頌つと云爾。

因云。本書の資料は、別に『毎日新聞』、『國民新聞』、『世界之日本』、『日本宗教』及び、徳富蘇峰、平田骨仙、大橋乙羽、三君の記事に得たるもの、亦殆んど其の半バを占む。また其の蒐集に就きては、鈴木榮作君専ら之に任じ、字句の校正は、難波常雄君主として之を擔當せられたり。ここに事實を明記して、深く兩君の勞を謝し、併せて前顯各新聞雜誌記者各位及蘇峰、骨仙、乙羽の三君に謝す。



戊辰の變は、おれは町飛脚の知らせによつて、幕閣よりも一日早く承知したけれど、おれは當時閑居の身だつたから、意見を進める機會を得なかつた。さて、翌日になつて、いよいよ幕閣に知れ渡ると、城中は鼎を沸すやうだつたヨ。おれは祭りよさへ騒ぐ江戸ッ見の事だから、江戸中の騒ぎも大抵察せられるだらう。この時、幕議では、事の起りが少々の行違ひだらう、大した事にもなるまいとの説だつたけれど

町飛脚

も、おれは獨りで、西郷めがこの機に乗じて、天兵を差し向けはしないかと心配して居た處が、果してやつて來たワイ。西郷は實にえらい奴だ。

死生一髪

大井屋

當時人心恟々として、おれは常に一身を死生一髪といふ際に置いて居た。おれの眞意が官軍にわからなくつて、官兵がおれの家を取り圍んだとも有た。また、幕臣中も慄悍きものは、動もすると、おれを徳川氏を賣るものと見做して、おれを殺さうとしたものも一人や二人ではなかつた。おれが品川の先鋒總督府と談判して歸りがけにも、薄暮、赤羽根橋を通つて居たら、鐵砲丸がおれの鬢を掠すめていつとから、おれは馬を下り、轡をとりて、徐かにそこを過ぎ、四辻から再び馬に乗つて歸つたツケ。

また歩兵が脱走を企てた時には、おれは屢々馳せて行て、之を鎮撫して居つたが、ある時も今日の九段招魂社のあたりで、説諭を加へて居るうちに、彈丸がおれの提燈を貫き、引續いてまたおれの馬の前を立つて居た一卒を倒したこともあつたヨ。この時には、おれは目前に佐藤繼信を見たヨ。

士を動かす

れ、れの家には、護衛も壯士も居なかつた。護衛や壯士は、實に恃むに足らぬ、また、恃む可きものではないヨ。壯士の代りに二三人の女中を置いて、來客の應接、その他を用を辨じて居たが、これは、どんを亂暴者でも、婦人には手を出すまいと思つたからサ。今もろの例に依つておれの家にはよの通り(傍に侍する婢を顧み)女ばかりを使つて居るヨ。アハ…………。

又當時は、八釜しやが随分諸國から遣つて來たヨ。併し勝に行ても駄目だどれもつたか知らぬが、れれの處へは誰も來ずに、大久保一翁や、山岡鐵舟の處へ皆な押し掛けて行て、幕府の意氣地がよいことを劇しく論じた様子サ。大久保も山岡も頗る閉口した様だつたから、そんな奴に取り合ふを、打ちやつて置け、といつてやつたら、後で何だかぶつくいつたさうだ。

自分の手柄を陳べる様で可笑しいが、おれが政權を奉還して、江戸城を引拂ふやうに主張したのは、所謂國家主義から割り出したものサ。三百年來の根底があるからといつた所が、時勢が許さなかつたら何うなるものか。且つ又都府といふものは、天

新法は云う

吾れも

下の共有物であつて、決して一個人の私有物ではない。江戸城引拂ひの事については、おれにこの論據があるものだから、誰が何といつたつて少しも構はなかつたのサ。各藩の佐幕論者も、始めは一向時勢も何も考へずに、無暗に騒ぎまはつたが、後には追々おれの精神を呑み込んで、おれに全意を表するものも出來、また江戸城引渡しに骨を折るものも現はれて來たヨ。併し此の佐幕論者ども、その精神は、實に犯すべからざる武士道から出たのであるから、申し分もない立派のものサ。何でも時勢を洞察して、機先を制することも必要だが、それよりも、人は精神が第一だヨ。

新法

江戸城受渡しの時、官軍の方からは、西郷が來るといふものだから、おれは安心して寝て居たよ。さうすると皆の者は、この國事多難の際に、勝の氣樂には困るといつて、吃いて居た様子だつたが、なに對手が西郷だから、無茶の事をする氣遣ひはないと思つて、談判の時にも、おれの慾は云はなかつた。たゞ幕臣が餓ゑるのも氣の毒だらう、それだけは、頼むせといつたばかりだつた。それに西郷は、七十萬石呉

田代 義典

れると向ふから云つたよ。

先年李鴻章が来る時にも、おれは前からいつたヨ。あれなら、談はさうにも出来る人物だから、こちらからは、餘り進んで慾をいはないがよい。出す時には、見切がはやく附く男であら、其の積りで談判しろ。と政府の人にも忠告して置いたヨ。それを、なに老爺がまた古風な考を持ち出す。外交の掛引は、そんな人好沙汰では行けないといはぬばかりに聞いて居たが、果して李に一層上を超されたツケ。幾ら支那人との談判だからといつたつて、相手の人物を見てやらないと、すべてこの通じさ。

維新の頃には、妻子までもおれに不平だつたヨ。廣い天下におれに賛成するものは一人もなかつたけれども(山岡や一翁には、後から少し分つた様であつた)おれは常小世の中には道といふものがあると思つて、楽しんで居た。また一事を斷行して居る途中で、おれが死んだら、たれがおれに代るものがあるかといふとも、随分心配ではあつたけれど、そんな事は一切構はず、おれはたい行ふべきことを行はうと大決心をして、自分で自分を殺すや

うを事さへなければ、うれでよいと確信して居たのサ。

おれなどは、生來人がわるいから、ちやんと世間の相場を踏んで居るヨ。上つと相場も、何時か下る時があるを、下つた相場も、何時かは上る時があるものサ。その上り下りの時間も、長くて十年はかからないヨ。それだから、自分の相場が下落したと見たら、じつと屈んで居れば、暫くすると、また上つて来るのをだ。大奸物大逆人の勝麟太郎も、今では伯爵勝安芳様だからノー。併し、今はこの通り威張つて居ても、又、暫くすると朦朧してしまつて、唾の一つもはきかけて呉れる人もないやうにあるだらうヨ。世間の相場は、まあこんなものサ、その上り下り十年間の辛抱が出来る人は、即ち大豪傑だ。おれなども現にその一人だヨ。

おれはさるい奴だらう。横着だらう。併しさう急いでも仕方がないなら、寐ころんで待つが第一サ。西洋人などの辛抱強くて氣長いには感心するヨ。

今の世に西郷南洲が生きて居たら、談し相手もあるに、

南洲の後家と話すや夢のあと

今の人はこの句の意を知るまいヨ。

* * * * *

全◎大◎き◎な◎人◎物◎とい◎ふ◎も◎の◎は◎、◎そ◎ん◎ろ◎に◎早◎く◎現◎は◎れ◎る◎も◎の◎で◎は◎な◎い◎ヨ◎。◎通◎例◎は◎百◎年◎の◎後◎だ◎。◎今◎一◎層◎大◎き◎い◎人◎物◎に◎な◎る◎と◎、◎二◎百◎年◎か◎三◎百◎年◎の◎後◎だ◎。◎そ◎れ◎も◎現◎は◎れ◎る◎と◎い◎つ◎た◎所◎で◎、◎今◎の◎様◎に◎自◎叙◎傳◎の◎力◎や◎、◎何◎ろ◎に◎よ◎つ◎て◎現◎は◎れ◎る◎の◎で◎は◎あ◎い◎。◎二◎三◎百◎年◎も◎経◎つ◎と◎、◎ち◎や◎う◎と◎、◎そ◎の◎位◎大◎き◎い◎人◎物◎が◎、◎再◎び◎出◎て◎來◎る◎ぢ◎や◎。◎其◎奴◎が◎後◎先◎の◎事◎を◎考◎へ◎て◎見◎て◎居◎る◎内◎に◎、◎二◎三◎百◎年◎も◎前◎に◎、◎丁◎度◎自◎分◎の◎意◎見◎と◎同◎じ◎意◎見◎を◎持◎つ◎て◎居◎た◎人◎を◎見◎出◎す◎ぢ◎や◎。◎そ◎こ◎で◎其◎奴◎が◎驚◎い◎て◎、◎成◎る◎程◎え◎ら◎い◎人◎間◎が◎居◎た◎な◎。◎二◎三◎百◎年◎も◎前◎に◎、◎今◎、◎自◎分◎が◎抱◎い◎て◎居◎る◎意◎見◎と◎、◎同◎じ◎意◎見◎を◎抱◎い◎て◎居◎た◎な◎。◎こ◎れ◎は◎感◎心◎な◎人◎物◎と◎、◎騒◎ぎ◎出◎す◎様◎に◎な◎つ◎て◎、◎そ◎れ◎で◎世◎に◎知◎れ◎て◎來◎る◎の◎だ◎ヨ◎。◎知◎己◎を◎千◎載◎の◎下◎に◎待◎つ◎と◎云◎ふ◎の◎は◎、

此の事サ。

今の人間はどうか。そんな奴は、一人も居るまいが。今の事は今知れて、今の人
に賞められなくては、承知しないといふ尻の孔の小さい奴ばかりだらう。大勳位と
か、何爵とかいふ肩書を貰つて、俗物かぶわい〜騒ぎ立られるのを以て、自分に
は日本一の英雄豪傑だと思つて居るではないか。君等はマアよく考へて見たまへ。
維新以後、未だ三十年を経たばかりではないの、僅か三十年の間に、人物が現はれ
うといつても、現はれやうがないサ。今日自分から騒ぎ出して、それが爲め、幾分か
俗物共に知られて居る奴等は、さうサ、今から三十年も経たない内に、すぐ忘れ
てしまふだらうヨ。それは近い内に死ぬるけれども、君等はまだ若いから、三十年
や五十年は、生きて居るだらうが、おれのいつた事が、嘘になるか、眞なるか、
試して見るとよ。

維新の時でもそうだったヨ。水戸の烈公は、えらいといふので、非常の評判だった
ヨ。實にその頃は、公の片言隻語も、取つて以て則とる位の勢ひサ。然るに、今

はどうだ。日本國中で、烈公を知つて居るものが、何人あるか。成る程、水戸の近邊へ行つたら、匹夫匹婦も皆その名を記憶して居るだらうが、その外の土地では、誰も知らないヨ。その通りだ。天下の安危に關する仕事を遣つた人で、あくては、なんなに後世に知らるるものではない。一寸芝居を遣つた位では、天下に名は擧らな
いサ。

これは、今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ。

西郷と
小楠

横井は、西洋の事も別に澤山は知らせ、おれが教へてやつた位だが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、及ばぬと思つた事が屢あつたヨ。おれは窃に思つたのサ。横井は、自分に仕事ををる人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思つたのサ。

その後、西郷と面會したら、うの意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だつたけれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して西郷ではあるまいかと、また窃に恐れたヨ。

そこで、おれは幕府の閣老に向つて、天下にふの二人があるから、その行末に注意なされと進言して置いた所ろが、その後、閣老はおれに、その方の眼鏡も大分間違つた、横井は、何かの申分で塾居を申付けられ、また西郷は、漸く御用人の職であつて、家老などいふ重き身分でゐいから、兎ても何事も出来まいといつた。けれどもおれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、最早それ迄だと心配して居たに、果して西郷は出て來たワイ。

おれが初めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられる爲めに、おれが召されて京都に入る途中に、大坂の旅宿であつた。うの時、西郷は御留守居格だつたが、轡の紋の附いた黒縮緬の羽織を着て、中々立派な風采だつたヨ。

西郷は、兵庫開港延期のことを、餘程重大の問題だと思つて、随分心配して居た様だつたが、頻りにおれにうの所置法を聞かせよといふワイ。そこで、おれがいふに、まだ確には知れぬが、この度の御召しは、多分談判委員を仰付けられる爲めだらう。併し小生は、別段この談判を難件とは思はぬ。小生がもし談判委員とあつたら、

まづ外國の全權に、君等は、山城なる天皇を知つて居るか尋ねる。すると彼等は、必ず知つて居ると答へるだらう。そこで、然らば、うの天皇の叡慮を安んじ奉る爲めに、暫く延期してくれと頼む。そして一方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後その他の大名を集め、その意見を採つて陛下に奏聞し、更に國論を決めるばかりサ、と斯ういつた。それから彼れの問ふに任せて、われは幕府今日の事情を一切談じて聞かせた。彼がいふには、兎角幕府は薩摩を悪んで、漫りに猜疑の眼を以て、禍心を包藏するやう小思ふには困るといふから、おれは、それは幕府のつまらない小役人どもの事だ。幕府にも人物があらうから、そんな事は打ちやつて措きたまへ。かやうの事に掛念したり、憤激しよりするのは、貴藩の爲めに決してよくないといつたら、彼も承知したといつたツケ。

坂本龍馬が、會てこれに、先生屢々西郷の人物を稱せられるから、拙者も行って會つて来るにより、添書してくれといつたから、早速書いてやつたが、その後、坂本が薩摩からかへつて来て云ふには、成程西郷といふ奴は、わからぬ奴だ。少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きく響く馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も中々鑑識のある奴だヨ。

西郷に及ぶとの出来あいののは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で、江戸城に乗込む。おれだつて事に處して、多少の權謀を用ひないともないが、たゞこの西郷の至誠は、れれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して、小籌淺畧を事とするのハ、却てこの人の爲めに、腸を見すかされるばかりだと思つて、れれも至誠を以て之に應じさから、江戸城受渡しも、あの通り立談の間に済んだのサ。

西郷は、今云ふ通り實に漠然たる男ぶつたが、大久保は、之に反して實に截然として居たヨ。官軍が江戸城にはいつてから、市中の取締りが甚だ面倒になつて来た。

これは幕府は倒れたが、新政が未だ布かれないから、恰度無政府の姿になつたのサ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局をれれの肩に投げ掛けられていて、行つてしまつた。どうか宜しく頼み申します。後の處置は、勝さんが

何、ど、か、な、さ、る、べ、ら、う、と、い、つ、て、江、戸、を、去、つ、て、し、ま、つ、た。この漠然たる『べらう』には
れ、れ、も、閉、口、し、た。實に閉口したヨ。これが若し大久保なら、これはかく、あれはか
く、と、そ、れ、一、談、判、し、て、置、く、べ、ら、う、に、さ、り、と、は、餘、り、漠、然、で、は、な、い、か。併し考へて見
る、と、西、郷、と、大、久、保、と、の、優、劣、は、こ、こ、に、あ、る、の、だ、ヨ。西、郷、の、天、分、が、極、め、て、高、い、所、以
は、實にここにあるのだヨ。

西郷は、どうも人にわからない所があつたヨ、大きな人間をどうんなもので……小
い奴なら、何んなにしたつて直ぐ肚の底まで見えてしまふが、大きい奴になるとさ
うでない。例の豚姫の話があるだらう。豚姫といふのは、京都の祇園で名高い……
尤も初めから名高かつたのではない。西郷と關係が出来てから、名高くなつたの
だ、が……豚の如く肥へて居たから、豚姫と稱せられた茶屋の仲居だ。この仲居が、
酔く西郷にはれて、西郷も亦この仲居を愛して居たのヨ。併し今の奴等が、茶屋女
とくつ付くのは譯が違つて居るヨ。どうもいふにはれぬ善い所があつたのだ。
これは固より一の私事に過ぎないけれど、大体が先づこんな風に常人と違つて、餘

名高か
板橋の仲居地

程大きく出来て居たのサ。

西郷の大度洪量に就て、維新當時の模様を、モ少し細かにいふと、官軍が品川まで推
し寄せて来て、今にも江戸城へ攻め入らうといふ際よ、西郷は、それが出した僅か
一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷まで、のそく談判に遣つてくるとは、な、か、く、
今の人では出来ない事だ。

あの時の談判は、實に骨づつたヨ、官軍に西郷が居なければ、談は、と、も、纏、ま、ら、な
かつただらうヨ、その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが来る、板橋から
は伊知地などが来る。また江戸の市中では、今にも官軍が乗込むといつて大騒ぎサ。
併し、それは外の官軍には頓着せず、ただ西郷一人を眼にしていた。

ろ、こ、で、今、談、し、た、通、り、極、短、い、手、紙、を、一、通、遣、つ、て、双、方、何、處、に、か、出、會、ひ、た、る、上、談
判致したいとの旨を申送り、また、其の場所は、即ち田町の薩摩の別邸がよからう
と、此方から撰定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をねこして、
い、よ、く、何、日、の、何、時、に、薩、摩、屋、敷、で、談、判、を、開、く、と、な、つ、た。

當日たれば、羽織袴で馬に騎つて、従者を一人つれたばかりで、薩摩屋敷へ出掛け
た。まづ一室へ案内せられて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩
摩風の引き切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、
これは實ふ遅刻しまして失禮と挨拶しながら坐敷に通つた。其の様子も、少しも一
大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

さて、愈々談判になると、西郷は、これのいふ事を、一々信用してくれ、其間に一點の
疑念も挟まなかつた。『色々六かしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受
けします。』西郷のこの一言で、江戸百万の生靈も、その生命と財産とを保つとが
来、また徳川氏もろの滅亡を免れたので。

若し之が他人であつたら、いや貴様のいふ事は、自家撞着ごとか、言行不一致ご
か、澤山の兇徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何所にあるかとか、
いろ／＼喧しく責め立てるに違ひない。万一さうなると、談判は忽ち破裂ご。併し
西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達観して、而かも果斷に富んで居たには、

おれも感心した。

この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などいふ豪傑連中が、大勢で次の間へ
来て、窺かに様子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし／＼と詰
めかけて居る、其の有様は、實に殺氣陰々として、物凄程ごつた。然るに西郷は
泰然として、あたりの光景も眼に入らないものやうに、談判を仕終へてから、れ
れを門の外まで見送つた。それが門を出ると、近傍の街々に屯集して居る兵隊は、
どつどつ一時に推し寄せて来たが、それが西郷に送られて立つて居るのを見て、一同
恭しく棒銃の敬禮を行つた。おれは自分の胸を指して兵隊に向ひ、何れ今明日中に
は、何とか決着致すべし。決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬるとも
あらうから、よく／＼この胸を見覚えておかれよ、と云ひ捨てて、西郷に暇乞ひを
して歸つた。

此時、おれが殊に感心したのは、西郷がこれに對して、幕府の重臣たるだけの敬禮
を失はず、談判の時にも、始終坐を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光で

西郷の記

以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつた事だ。

小楠の事は、尾張の或る人から聞いて居たが、長崎で初めて會つた時から、大に敬服して、屢々人を以て其の説を聞かしたが、その答には、常に『今日はかう思ふけれども、明日になつたら違ふかも知れない』と申添へてあつた。そこで、それは、いよ／＼彼の人物に感心したヨ。

大抵の人は、小楠を取留めない事をいふ人だと思つたヨ。維新の初に大久保すら、小楠を招いたけれど、思ひの外だといつて居た。小楠は、とても尋常の尺では分らない人物だ。併し實際、物のよく分つて、途方もない聰明な人だつたヨ。それが米國から歸つた時、彼が米國の事情を聞くから、色々教へてやつたら、一を聞いて十を知るといふ風で、忽ち彼國の事情に精通してしまつたヨ。

小楠は能辨で、西郷は訥辨だつた。

小楠が春嶽公に用ひられた時、もちつと手腕を振ふとは、出来なかつたかど云ふ人もあるが、あの時は、實際出来なかつたのだヨ。又、維新の時に西郷は、何故小楠

に説き勧めなかつたかといふ人もあるが、それは必要がなかつたからサ。

小楠は、毎日藝者や幫間を相手に遊興して、人に面會するのも、一日に一人二人會ふと、もはや疲勞したといつて斷るなど、平生我儘一邊に暮して居た。だから春嶽公に用ひられても、また内閣へ出て、一々政治を議するなどは、うるさかつただらうヨ。かういふ風だから、小楠の善い弟子といつたら、安場保和一人位のものだらう。つまり小楠は、覺られ難い人物サ。

齊彬公は、えらい人だつたヨ。西郷の事は、安政の頃に公から聞いたツケ。ある時に、それは公と藩邸の園を散歩して居たら、公は二ツの事を教へて下さつたヨ。それは、人を用ひるには、急ぐものでないといふ事と、一ツの事業は、十年経たねば取りとめ、の付かぬものだといふ事と、この二ツだつたツケ。

小栗上野介は、幕末の一人物だヨ。あの人は、精力が人にすぐれて、心計に富み、世界の大勢にも罫ば通じて、而かも誠忠無二の徳川武士で、先祖の小栗又一によく似て居たよ。一口にいふと、あれは、三河武士の長所と短所とを兩方具へて居つたの

ヨ。然し度量の狭かつたのは、あの人のためには惜しかつた。

小栗は、長州征伐を奇貨として、まづ長州を斃し、次に薩州を斃して、幕府の下に郡縣制度を立てようと目論んで、佛蘭西公使レオン、ロセスの紹介で、佛國から銀六百万兩と、年賦で軍艦數艘を借り受ける約束をしたが、これを知つて居たものは、慶喜殿外閣老を始めて四五人に過ぎなかつた。

長州征伐が六ヶしくなつたから、幕府は、おれに休戦の談判をせよと命じた。そこで、それが江戸を立つ一日前に、小栗が窺かにおれにいふには、君が今度西上するのは、必ず長州談判に關する用向だろう。若し然らば、實は我々に斯様の計畫があるが、君も定めて同感だらう。故に、敢へて此機密を談すのだといつた。これも此處で争うても、益がないと思つたから、たゞさうかといつて置いて、大坂へ着いてから、閣老板倉に見えて、承れば斯々の御計畫がある由だが、至極御結構の事だ。然し天下の諸侯を廢して、徳川氏が獨り存するのは、これ天下に向つて私を示すものではないか。閣下等、若し左程の御英斷があるなら、寧ろ徳川氏まづ政權を返上して、天

徳川の私。

下に摸範を示し、然る上にて、郡縣一統の政をしては、如何、といつた處が、閣老は愕りしたヨ。

さうする内に、慶應三年の十二月に、佛國から破談の報せが來た。後で佛蘭西公使がおれに、小栗さん程の人物が、僅か六百万兩位の金の破談で、腰を抜かすとは、扱ても驚き入つた事だといつたのを見ても、この時、小栗が何れ程失望したかは知れるヨ。小栗は、僅か六百万兩の爲めに徳川の天下を賭けうとしたのだ。越えて明治元年の正月には、早くも伏見鳥羽の戦が開けて、三百年の徳川幕府も瓦解した。小栗も今は仕方がないものだから、上州の領地へ退居した。それを豫て小栗を悪んで居た土地の博徒や、また小栗の財産を奪はうといふ考の者どもが、官軍へ讒訴したによつて、小栗は、遂に無慘の最後を遂げた。然しあの男は、案外清貧であつたといふことだヨ。

佐久間象山は、物識りだつたヨ。學問も博し、見識も多少持つて居たヨ、併し、どうも法螺吹きで困るヨ。あんな男を實際の局に當らしたらどうだろ、か……何とも保證

は出来ないハ。

藤田東湖は、多少學問もあり、劍術も達者で、一廉役に立ちさうな男だつたヨ。併し、どうも輕卒で困るヨ。非常に騒ぎ出せてハ。

木戸松菊は、西郷みどりに比べると、非常に小さい。併し綿密の男サ。使ひ所によりては、随分使へる奴だつた。餘り用心し過ぎるので、とても大きな事には向かないがハ。

山岡も一翁も熱性で、切迫の方だつたから、可哀さうに若死をしたヨ。ねれば、たゞづるいから、よんなに長生をしどるのサ。

大樂源太郎は、善さうな男だつたヨ。餘り度々逢つた事はないが、話せる奴らしくつた。長州人には珍らしい男サ。

二宮尊徳には、一度會つたが、至つて正直な人だつたヨ。全体あんな時勢には、あんな人物が澤山出来るものだ。時勢が人を作る例は、ねをば確かに見たヨ。大迫貞清といふ男ハ、先年(二十九年)死んだが、一寸人物だつたヨ。

全体、維新後の静岡縣は、舊幕のものが澤山移住して居た所だから、中々尋常の人では、治め難い事情もあつたが、かういふ所の縣令には、大迫が適任だと思つて、おれは彼を推薦したのサ。とあるが、大久保は不承知の様だつたけれども、まあおれに見所があるから、是非にと迫つて、強ひて赴任さす事になつたが、矢張り、おれの望み通りうまく遣つてのけたヨ。

大迫は、極めて大量寛宏の男で、静岡では、別段これといふ干渉壓抑がましい事はせず、一意外に公平至誠の考を以て、縣治を施して、敵も造らず、味方も造らず、すつと大様にやつたから、徳望は自然に歸し、縣下は無爲にして治まつたのサ。

併し、初めは、大迫の腕で、あの難治の静岡に縣令となることが出来るかと危ぶんで居た人も、大久保の外に多かつたが、九年の間、一度の浪風も起さず、至極穩やかに縣民の心を統一した手際を見ては、何人も今更のやうに感心したヨ。縣令から一躍して、警視總監に任用せられたのも、大方その結果だらう。

今北洪川は、曾て其名を聞いて居たから一度訪問して見たが、あの人の、少し俗氣か

ある。近代の僧門では、どうしても行誡が一番だらうヨ。

北條義時は、國家の爲めには、不忠の名を甘んじて受けた。即ち自分の身を犠牲にして、國家の爲めに盡したのだ。その苦心は、とても軽々たる小丈夫には分らない。頼山陽などは、未だ眼孔が小さいワイ。これも幕府瓦解の時には、せめて義時に嗤はれないやうにと、幾度も心を引き締めたことがあつたツケ。

足利義満が、明の皇帝から、日本國王に封ぜられたのを、歴史家は、口を極めて攻撃する様だが、それは何も義満を辨護するではないけれど、彼が虚名の封冊を受けたのは、之によりて實際の利益を採らうといふ考だつたのを忘れてはいけなないヨ。彼が明の頭を下げて、としく永樂錢の惠與を請うた所を見ると、彼も中々喰へない男サ。

細川頼之は、日本の大經濟家だヨ。海外貿易から、足利氏財政の制度まで、この人の創案に出たものが多い。

北條早雲といふと、誰もたゞ爛眼な戦將だばかり思ふけれども、あれは、また非凡

の政治家だヨ。もとの關東八州は、室町將軍の領地で、租税の苛煩なのは、日本一の處だつた。大方七公三民位に當つたらう。早雲は、これを察して法を三章に約し、大に租税を軽減したものだから、民のこれに従ふとは、水の下きに就くやうだつた。あれが羈旅の身を以て、手に唾きして關八州を収めたのは、獨り英雄の心を攪たためばうりではあゝ。また民心を服し得たからだ。

西行法師は、古今第一等の人物だらう。試みにその歌を誦して見ると、彼が高潔の姿は、彷彿として眼の前に顯はれるヨ。一旦志を立て、超然として脱俗し、少しも世を怨む風がなく、一生を風雅に托したのは、實に高士ではない。

柳生但馬の、澤菴禪師にねけるは、大方その跡を晦ましたものだらうヨ。道を聞くにかこつけて、四方の形勢を聞いたのだらう。あんな時代に、諸方に旅行するものは、僧侶ばかりだらう。政事家は、僧侶にでも聞かなければならなかつたのサ。物徂徠は、豪傑儒た。一體儒者が徳川幕府へ登用せられるのは、大抵林家の取り成しによるのだが、獨り林家の下風に立たなかつたのは、白石と徂徠とばかりだつた

ヨ。徂徠が曾て布衣を以て、將軍に謁見したときに、將軍は、朝鮮修好に關する機密の事を相談せられた。所が徂徠は、多くの役人どもが恐れ入つて、びり／＼震へて居る將軍の面前で、談論自若として、傍若無人の有様であつた。侍臣は、見かねて、餘り聲が大きいと咎めたら、徂徠は、平氣な顔で、如何に聲が大きくても。朝鮮まで聴こまいといつたさうだ。その豪懷のぶどが想ひやられるワイ。

清の太祖は、千古の偉人だ。あんる傑物は、何れの世にもあるまいヨ。

李鴻章は、あか／＼喰へない老爺だ。彼が先年小山六之助に狙撃せられた時も、痛いとも、痒いとも、何とも感ぜぬ風で、自國の醫者が、ちやんと付いて居るにも拘はらず、いはゞ敵國の醫者の療治を受けて、少しも疑はなかつた所などは、流石は李鴻章だ。何處に底があるのやら、一寸分らないサ。

朴泳孝は、善人だ。何時かれの所へ來て、某伯が金を千兩貸すといはれるけれども、否だといふから、そんなら前は、金があるかと問うたら、金はありませんといふのヨ。おれも面白い男だと思つたら、どうだ、おれが金を遣らうかといつたら、大

層悦んで、先生が下さるなら貰ひませうといつたから、月々少しづつ呉れて遣つたヨ。人間も生れが大事だ。小國でも、貴族は貴族だけ潔白な心を持つて居る。

おれも自國の外交の事には、餘程氣を揉んで居たと見えて、曾て金玉均と同道して來て、種々の問を起すから、おれは魯西亞おは依りなさいといつたら、金玉均は、おれの語を誤解したものと見えて、ひどい事を仰せられるといつたが、その後は、丸で來なかつたヨ。なに、おれも依りなさいといつた所で、屈服しろといふ考ではなく、たい強大の隣國を敵にしては、不利益だといふ意味なのサ。

丁汝昌は、おれが海外の一知己だつたが、日清戦争のときにとう／＼自殺してしまつた。當時、おれは今昔の感に堪へず、かういふ詩を作つた。併し平仄などは、無茶だヨ。

二月十七日。聞ニ舊知清國水師提督丁汝昌自殺之報。我深感君之心中、果決無私。亦嘉從容不誤其死期。嗟歎數時。作蕪詩一慰其幽魂。

憶昨訪我屋。一劍表心裏。委命甚義烈。儒者爲君起。我將識量大。萬卒皆遁

また病氣を推して、こんな文章をも書きのけた。

廿八年二月十六日、丁汝昌その率うる所の軍艦を以て、降旗我に降ると。其可否得失を論じて、我が意見を聽く。我默識するあるを以て答へず。其後、兩三日を以て、丁は降る順序を終へ、自刃して死すと聞く。我是を聞て、彼の心裏を思ひ、歎息數時。憶記す、彼が我邦に來りし時、我家を尋ね話次懇々。其後、軍艦に招き、我に對して軍艦總督の格を以てと。今、其話次の一二、憶に存ずるものを記し、竊に彼の特遇に答ふ。海外一知己を失ひしを歎じ、數章を記す。

丁氏は、軀幹巨大、面皮淺黒く、相見る所、毫も威嚴なし。且つ舉止活潑、邊幅を修め、言詞眞率、一僮夫に類す。彼云、君を訪問せる者、君昔海軍を創始し、頗る艱難を経たりと。我は昔邦民の動亂せし時、李氏の部下に屬し、難危を経たる殆七ヶ年、其登庸を蒙り始めて海軍に入る。其子弟二百名と共に英國に到る。歸り來り一二の軍艦に將たり。然れども海軍の困難なる、得たる所なくして其任に不堪も

のあり。且有司は其用を察せず、やゝもすれば無用の長物として百事故障を成す。君が昔時の困苦可_レ察ありと。彼一見舊知の想をなし、臆を開く。其談甚聞く可_レ敬す可_レきものあり。

此處まで書いた所が、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛がし出したものだから、止むを得ずそれかりにした。今、その續を口で話さうワイ。

あの時、丁が支那當時の海軍に就いていふには、今日我國の海軍は、如何にも見所がなく、お耻かしき次第だが、拙者も、たゞ將來に期する所があつて、聊か自から奮勵して居るばかりだ。拙者は、曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて英國へ留學し、全國の士官に就いて、少しく海軍の事を學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やう／＼今日の海軍を創設したけれども、これはたゞ兒戯に過ぎない。その事は李氏も承知と見えし、今日の海軍は、何の役にも立たない。たゞ今後十年を期して、大成すべきのだが、今日あるのは、その時の基礎とするにも足らなからず、常々われ／＼に云て居る。拙者は、曾て貴著『海軍歴史』を讀んで、君が幕

末から王政維新の際にかけて、海軍を經營せられたる閱歷と偉勳とを承知し、拙者が今日の境遇にくらべて、うたた同情の感に堪へず。切に敬慕致し居るといつた。丁のいふ所は、その語は、甚だ謙遜で、その望は、甚だ遠大であるから、おれも感心して、海外に一知己を得たのを喜び、いろくおれの考へをも談した。

その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せられ、色々丁寧な饗應を受けたが、おれは一片の氷心を表はを爲めに、一首の和歌を一口の寶劍に添へて彼に贈つた。そして艦内残る隈なく見物えたが、一体の事もなかく整頓して、日常用ひる品などは、一つも外國製のを用ひず、支那製ばかり用ひて居た所などは、實に感心したヨ。軍服なども、西洋服と支那服とを折衷したのだといつて、丁は自分の着けて居るのを指し示した。

丁に殉死した劉步蟾の如きも、この時面會した様に覺えるが、確か沈黙がちな性質で、小男ながら膽氣がありさうだつた。

丁の如き

劉步蟾

おれと丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戦争の時分には、思ひは始終北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が氣に掛かつた。またあのときの聯合艦隊の司令官であつた伊東中將も、昔し神戸でおれの塾にゐた縁故から、一生一度ともいふべき晴れの舞臺に上つたからは、どうか日本海軍の名譽と、一身の手柄を立てさせたいとかもつて、當時おれの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど千々に碎けたヨ。

然るに、威海衛の海戦は、敵味方ともこの上るき名譽を輝かし、世界の海戦史上に、一と花咲かせたと聞いて、おれは實に嬉しかつた。かくあつてこそ、おれの心配も甲斐があるといふものだ。

丁がああの時の處置は、實に一點の非難すべき所もなく、海戦上に一個の新事例を教へたといつてよい。陸戦のとき、あの様な場合ふ處する例は、これまで幾らもあつたけれど、世界に海戦といふほどの海戦が昔しからなく、従つてあんな場合も少ないものだから、之れに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置

は、實に戰鬪力を失つた艦長が取るべき模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戰史の秋の野に、一點の花紅を點じたのだ。

凡そ人間が何事にか激した時には、死ぬるのは譯もない事だらう。併しよくく事局の前後を達觀して、十分善後の策を立て、然る後、從容として死に就くのは、決して容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には數年來苦心養成した所の、他日支那海軍の要素たるべき、あの二百名の秀才があり、傍には色々面倒な事をいひ出せ雇外人があり、これ等の處置をつけねばならぬ。寧ろ斃れるまで奮戦せうかといふと、十年素養の二百名を殺さるればならず。それでは降参せうかといふと、自分の良心はどうしても許さまい。そこで丁は沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、且つは雇外人への義理から、一身と軍艦とを犠牲にして顧みなかつたのだ。その心の中は、實に憫むべきではないか。

時勢は、人を造るものだ。今日いろいろの學問や、智慧のある人だが、これから種

々の困難に出會つて、實際にその學問を試したり、その心膽を鍊つたりなどする

と、將來に起るべき、東洋の大禍亂をも、切り開くだけの人物になれるだらうヨ。今日は、實に間の見の時代だから、萬事思ふ通りにならぬのだ。經驗もあり、信用もある人物は、年を取らない内に、はや老朽してしまひ。若手の敏腕家は、まづ經驗と信用とがないと云ふ風で、當分はどうも仕様がなないヨ。

* * * * *

一個人の百年は、ちやうど國家の一年位に當るもの。それ故に、個人は短い見を以て、餘り國家の事を急ぎ立てるのはよくないヨ。徳川幕府でも、もうとても駄目だと諦めてから、まづ十年も續いたでない。

時に古今の差なく、國に東西の別はない。觀じ來れば、人間は始終同じ事を繰り返して居るばかり。生麥、東禪寺、御殿山。これ等の事件は、皆な維新前の蠻風だと云ふけれども、明治の代になつても、矢張り、湖南事件や、馬關騒動や、京城事變があつ

たではないか。今から古を見るのは、古から今を見るのと少しも變りはないサ。

此頃元勳とか何とか、自分でえらがる人達に、かういふ歌を詠んで遣つたヨ。

時ぞとて咲きいでそめしのへり咲

咲くと見しまにはやも散りなん

あれ等に分るか知らん。自分で豪傑がるのは、實に見られないヨ。あれ等はもう年が寄つた。

たをやめの玉手さしかへ一夜ねん

夢の中なる夢を見んとて

政治家も、理窟ばかり云ふやうになつては、いけない。徳川家康公は、理窟はいはなかつたが、それでも三百年續いたヨ。それに、今の内閣は、僅卅年の間に、幾度代つたやら。

全体、今の大臣等は、維新の風雲よ養成せられたなどと、大きな事をいふけれど、實際劍光砲火の下を潜つて、死生の間に入出して、心膽を練り上げた人は

少ない。だらう、一國の危機に處して惑はず、外交の難局に當つて恐れない、といふほどの大人物がないのだ。たい先輩の尻馬に乗つて、そして先輩も及ばないほどの富貴榮花を極めて、獨りで天狗にゐるとは恐れ入つた次第だ。先輩が命かけて成就した仕事を譲り受けて、やれ伯爵だとか、侯爵だとかいふ様ナ事では、仕方がない。世間の人には、もすこし大膽であつて貰ひたいものだ。政治家とか、何とかいつても、實際骨のあるものは、幾らもありはしない。大きく見積つても六百位のものサ。然るに、今の大臣などは、この六百ばかりを相手に、わいゝ騒いで居るではないか。この弱虫のふれでさへ、昔は三百諸侯を相手に、角力を取つたともある位だのにナ。

政治をとするには、學問や智識は、二番めで、至誠奉公の精神が、一番肝腎だ。舊幕時代でも、田沼といふ人は、世間では彼はいふけれども、矢張り人物サ。兎に角政治の方針が一定して居つたヨ。

この時分について、面白い話があるが、この頃、聖堂がひどく壞れて居たらうら、林

政治
の
方
針
が
一
定
し
て
居
つ
た
ヨ

文宣公

仲尼

孔子

大學頭から修理の事を申し出たが、その書面の中よ『文宣公の廟云々』といふことがあつた。すると右筆等は集まつて、文宣公とは、どんな神様であらうかと色々評議をしたけれども、時の智者を集めた右筆仲間、文宣公を知つて居るものがなかつた。そこで、文宣公とは何所の神だ、と附箋をして書面を返却した。大學頭は直ぐに文宣公とは、唐土の仲尼の事だといつてやつたけれども、それでもまだ分らない。そこで、大學頭もたまらぬ、仲尼とは、子曰はくの孔夫子の事だといつた。それで右筆もやうやく合點が行たといふとだ。

この話は、舊平戸藩で明君と聞けた静山公が、儒者を集めて、種々の話をさせて、それを筆記した『甲申夜話』といふ隨筆で見たが、なか／＼面白い。全體その時代の眞面目は、正史よりも、却つてこんな飾り氣のない隨筆などで分るものだ。

この話は、實に面白いではないか。右筆といへば、今の秘書官だが、宰相の片腕ともなるべきこの右筆が、孔子の名さへ知らないといへば、その人の學問も大抵は知れる。之に較べると、今の秘書官などは、外國の語も二つや三つは讀めるし、やれ

法律とか、やれ經濟とか、何一つとして知らないものはない。然るに、不思議のとは、孔子の名さへ知らない右筆を使つた時の政治より、萬能膏の秘書官を使ふ時の政治が、格別優つても居ないといふ事だ。畢竟、これも政治の根本たる、至誠奉公といふ精神の關係だらう。

昔し扇谷と北條との戦に、扇谷の兵が負けて、武州八王子の城を引き擧げて、北の方へ逃げた。その時、扇谷の家來に難波田彈正といふ勇者があつたが、北條の兵に追撃せられて、一生懸命に逃げる途中で、馬が斃れた。彈正は、徒歩で逃げうとした所を、北條の兵が、難波田とも呼ばれる勇士が、敵に後ろを見せるとは、見苦しうと呼ぶはつた。さうすると、難波田は少しも動ぜず、聲高らかに

君をおきてあぶし心をわが持たば

末の松山浪もこゑあん

といふ古歌を詠じた。ところが、追手の兵もさる者だ。この歌を聞いて、我々は勇士の忠膽を知らなかつた。死は易く、生は難し。難波田は、我が身の耻を忍んで、主

君扇谷の跡を追ふのだ。かゝる忠臣を追窮するのは、決して武士道でないといつて、そのまゝ見のがしたといふ話がある。志士、身を以て國に許すには、たゞ一身を以て、國家に奉ざるの外はない。難波田の如きは、實に皆の者の手本だヨ。又凡べて世の中を治めるには、大量寛宏でなくては駄目サ。八方美人主義では、その主義の奏効にばかり氣を取られて、國家の爲に大事業をやることは出来ない。戊辰の事だつてさうだ。若しあの時、各藩に紛起した議論を一々氣に懸けて、何れへも當り障りのないやうにせうとでも思つたなら、とても今日の如き結果は、見られなかつたいらうヨ。自分よ一定の見識がありさへすれば、如何なる事が起らうとも、一向構ふことはない。天下國家をして、正當な針路を進ませうといふ、大きい割出しがあるなら、區々たる小人の議論などは、聞かなくてもよいのだ。

文盲の徒
の純粹無垢

又政治は、理窟ばかりで行くものではない。實地に就いて、人情や世態をよくく觀察し、その事情に精通しなければ駄目だ。下手な政論を聞くよりも、無學文盲の徒を相手に話す方が大いにましだ。文盲な徒の話は、純粹無垢で、而かもその中、世人の一大道理がこもつて居るヨ。

新門の辰
の骨が折れた

おれも維新前には、種々の仲間と交際したヨ。新門の辰など、隨分物の分つた男だつた。あんな男は、金や威光にはびくともせず、たい意氣づくで交際するのだから、全じ交際するにも力があつたヨ。官軍が江戸城へ押し寄せて來た頃には、おれも大に考へる所があつて、所謂破落漢の糾合に取掛つた。それは隨分骨が折れたヨ。毎日役所から下ると、直ぐに四手籠に乗つて、あの仲間で親分といはれる奴どもを尋ねてまはつたが、骨が折れるとはいふものゝ、あかしく面白かつたヨ。貴様等の顔を見こんで頼むとがある。併し貴様等は、金の力やお上の威光で動くひとではないうら、この勝が自分でわざとくやつて來たと言ふと、へー分りました。この顔が御入用から、何時でも御用に立てまをといふ風で、その胸のさばけて居る所などは、實に感心のものだ。官軍が江戸へはいつて、暫時無政府の有様であつた時にも、火付けや盜賊が割合に少なかつたのは、おれが豫めこんな仲間の奴を取り入れて、おいたからだヨ。

茶屋の女將にも澤山知り合ひがあつたヨ。この仲間もなか／＼譯が分つたもので、人間の相場や、人と人との關係などは、ちやんと飲み込んでしまつて居るヨ。それ故、こちらから頼まなくつても、向ふからこちらの腹を見抜いて、何時でもおれが行くと直ぐに、こなひだは何藩の誰と何藩の誰とが見れて、こんな話やこんな議論がありましたなどと、頼みもしない前から話して呉れる所を、その氣轉には實に感心するヨ。こんなものには、おれの方からも氣をきかして、歸る時などは五十兩も投り出して、これがおれの名刺だ、よく讀めるだらう位のしやれをいつて歸るの

世間では、茶屋をどをば、人間墮落の場所といつて撥斥するけれども、こまかに觀察すると、その中にはなかなか面白味があるものだ。畢竟、その人の見やうによつて、善ともなり悪ともなり、利ともなり害ともあるのだ。其處がまた世の中の面白

い所サ。併し、今の政治家には、こんな瑣細の處ろまでに注意する人はあるまい。行政學を

冊讀んで、天下の機關がうまく廻轉すれば、世の中は樂なものだ。御前とか閣下とかそんな追従ばかり聞いて居らずに、大臣なども、少しは飾り氣のよい卷舌でも聞いて見るが藥だヨ。

尊王心と愛國心とが一致しないと、尊王の實は擧がらないヨ。當世の尊王家だちには、ちと規模を大きくして貰いたいものだ。陪臣國命を執れば亡ぶ、と聖人はいはれたけれども、北條は、九代も續いたではないか。そして北條は、天下の執權でも、その頃は、わづかひ從四位下で、かく申とおれよりも下ではあいか。おれは、從二位勳一等の伯爵様だらうノ！……。人民を離れて尊王を説くのは、そも／＼も末だワ

文臣は、才智があつても勇斷がなく、武臣は、勇斷があつても才智がないのは、實に古今全一の嘆だ。大事に當つて、國家の安危と、万民の休戚とを一身に引き受け、そして斷々乎として、事を處理するやうな大人物は、今の世に何人あるか。當今の時勢、うたいこの嘆を深うするものがある。

國是とか何とか世間の人は喧しくいふが、口にいふばかりが國是でない。十年も百年も、確然として動かない所のもので、何人からも認識せられてこそ、始めて國是といふとが出来るのだ。

人はよく方針々々といふが、方針を定めて何するのだ。凡そ天下の事は、豫め測り知る事の出来ないものだ。網を張つて鳥を待つて居ても、鳥がその上を飛んだらどうするか。我に四角な箱を造つて置いて、天下の物を悉く之に入れうとしても、天下には圓いものもあり、三角のものもある。圓いものや、三角のものを捉へて、四角な箱に入れうといふのは、さて、御苦勞千萬の事だ。

己れに執一の定見を懷き、これを以て天下を律せんとするの、決して王者の道でない。鳧の足は短く、鶴の脛は長いけれども、皆それ／＼用があるのだ。反對者には、どし／＼反對させて置くがよい。我が行ふ所が是であるなら、彼等も何時か悟る時があるだらう。窮窟逼促は、天地の常道ではないヨ。

幕府の軍艦が、箱館へ脱走した時にも、おれは棄て、置けば、彼等は軍費に窮して、

直に降参するだらうといつたけれど、朝議は聴かないで、之れを征討したものだから、あの通り澤山の生命と費用とを、徒らに消耗してしまつた。

マ、世間の方針々々といふ先生たちを見なさい。事が一たび豫定の方針通りに行かないと、周章狼狽して、そのさまは見られたものではないヨ。

行政改革といふとは、よく氣を付けないと弱い者いぢめになるヨ。おれの知つてる小役人の中にも、ふれ迄随分ひどい目に遇つたものもある。全体、改革といふとは、公平でなくてはいけない。そして大きい者から始めて、小さいものを後にするがよいヨ。言ひ換へれば、改革者が一番に自分を改革するのサ。松平越中守が、田沼時代の弊政を改革したのも、實踐躬行をやつて、下の者を率ゐていたから、あの通りうまく出来たのサ。

地方自治などいふことは、珍しい名目の様だけれど、徳川の地方政治は、實に自治の實を挙げたものだヨ。名主といひ、五人組といひ、自身番といひ、火の番といひ、みんな自治制度ではないかノ！

言も

政事家が、兎角宗教に手を出すのは、飛んでもない大事を惹き起す源だ。水戸の烈公が、幕府の譴責を蒙つたのも、餘り封内の坊主共をいぢめた祟りだヨ。一方に坊主を還俗さすれば、一方には金佛を鑄潰して、大砲をこしらへたから、坊主は京都の宮方に愁訴をし、宮方からは、幕府に迫つたものだによつて、幕府も止むなく、驕慢に募られるといふ辭柄を設けて、譴責を加へたのだ。從來徳川では、宗教は敬して遠ける方針を執つて、各派の僧侶には、高位高職に相當する位階を與へ、また寺には御朱印地を附けて、一切彼等の自治に任せただ。治めざるを以て、治めるのが、幕府の宗教に對する政略であつた。

易い文字
難い文字

昔し幕府が、種々の規則を出す時には、人民に分り易い文字を、成るべくは用ひるやうにして、掛りの人は、始終この事に心掛けて居た。然るに、今はその反對で、成るべく六かしい文字を用ひるやうになつて、なか／＼通常の人には分らない。何時であつとか、法典發布の前に、或る人がこれに、發布の上は、世論がやかましいべらうといつたから、これは、いや、法典の文字が人民に分らぬから喧ましくいふものは、少いべらうといつた事があつたが、果してその通りぶつた。そこで、これも六かしい文字を撰じも、一つの方便だと感じたヨ。それにつけて思ひ出すのは、清朝の官府語だ。支那は、元來漢字の本家だから、どんな字でも人民は讀むだらうと思はれるけれども、この官府語は、一種特別で、小説語でもなく、古文の語でもなく、流石の支那人も、讀めるものが少いと云ふ談だが、日本にもこれからは、次第に官府語が澤山出来るだらうヨ。

戦後の經營については、世間ではまだ喧しくいつて居るやうだが、尤もの事サ。この際當局者は、洒々落落として、胸襟を披いて、民間の議論をも聞くがよい。上下敵意を挾むやうでは、國の爲ふならない。既に戦争をするには、上下一致でやつたのだから、戦争の跡かたづけも、一致でやらなければならぬ筈だ。畢竟、多くの金を費やしたり、多くの人を殺したりして、戦争をしたのも、將來に大望があつたからだ。然るに、その大望を達せぬ前から、わい／＼騒ぐのは残念ではないか。天下の富を以てして、天下の經濟に困るといふ理屈はない筈だ。古への英雄は、皆經

濟の爲に苦心した。織田信長は、經濟上の着眼が周密であつたが、六雄八將に頭となり得たのサ。武田信玄も甲州の砂金を密に堀り出して、いろくの經濟制度を立てた。また南朝の正統も、北朝の細川頼之の經濟の爲に倒れた。あの芭蕉の如きも、非常の經濟家だつた。近江商人は、皆芭蕉の遺法に則つてやるのサ。

一番感心するのは北條氏の政治だ。元寇が三年續いても、軍事公債は募らば、總理大臣自から奔走するとはなく、九州の探題を防禦させて置いて、それで綽々として餘裕があるのだから。又、承久の亂の時には、泰時が單騎西に馳せ向へば、行くに三日で十萬騎が集まつたとは、當時の兵站や募兵の事は、羨ましい程整つて居たらしい。これは平生經濟の事に注意して居たからの事サ。陪臣であつて九代も續き、而かも國富み、民服したのは、尤もの次第だ。北條氏の榮えたのは、つまり儉の爲で、その亡びたのは、奢の爲だ。北條氏が佛法に歸依したのを見て、單に禪に凝つたと思ふのは間違ひだ。これもその大目的は、經濟の爲サ。當時宋が亡んで、元が起るときだつたから、北條氏は

宋の明僧智識を多く招いて、五山を開き、盛に佛法を信じた。そこで、かの『電光影裏截春風』の無覺禪師を始めとして、宋の人民が引きもきらずに續々と日本へ遣つて來るにつれて、錢の輸入は實に驚く程であつた。この事は、宋元通寶の我國に存せるとが現に夥しいのを見ても分る。つまり佛教を信じたのも、經濟に利用する爲サ。

併し、利用といつても、眞正の信仰がなくては、宗教の利用は出來ない。北條氏の患ふる所は、たい天下の子民といふとばかりだつた。それ故に、梅尾の明慧が、あるとき、泰時に向つて、北條氏が帝室に對する處行につきて忠告した際にも、泰時は、如何にも恐れ多いとだけけれども、民百姓の事を思ふと、止むなくかくせざるを得ないと、先父も常々申されたと答へたさうだ。その決心は、實に驚服すべしだ。おれも幕末の時に、果して北條氏の決心に倣ひ得るう得ないかと、自ら反省して考へたら、とても自分は倣ひ得ないと悟つた。

北條氏は、この通り善良なる政治家であつたけれども、何れも無學文盲で、

学者

醍醐天皇の勅文をさへ讀むとが出来なかつた。併し、實際の手腕の、あの通りサ。おれは學者が役に立たないといふと、維新前からよく、實驗したヨ。學者の學問は、容易だけれども、おれ等がやる無學の學問は、實に六づかしい。

宋元通寶
永樂通寶

北條時代には、宋元通寶を用ひ、足利時代には、永樂通寶を用ひて、知行高までを永樂錢で算用する程だつた。黄金の輸入は、足利時代が最も盛で、泉州堺浦は、當時貿易の中心であつた。即ち天下の富はこゝにあつたのだ。信長が上國の形勢を察する爲に、京都へ行つた時に、徑ちに道を轉じて堺に立寄つたが、これは堺の富に目をつけたからだ。その後、秀吉に至りては、堺の富豪を大坂に移して、その金を大坂城へ収めたが、大坂城に澤山の金があつたとは、秀吉が諸將に頒つた賞金の高でも知れる。

昔の日本は、豪族の力で維持せられて居たのだ。それは、歴史を讀むと直ぐ分るが、國家の爲に骨を折つて戦なした人は、皆この種族だヨ。あの島山重忠の如きも、秩父の庄司だ。豪族割據なといつて、恐れるものもあるけれど、決して恐るべきもの

ではない。舊幕の頃にも、おれは豪族保護の議論を提出したとがあつたが、外國へ對する時などには、なほ必要の勢力にゐるものだヨ。今頃でも地方からこんな種類の人があると、おれはよく教へて歸すが、併し今は、眞に豪族といはれる程の人の少ないヨ。まゝ東奥の本間ぐらゐのものだらうヨ。

おれは是迄随分外交の難局に當つたが、併し幸ひ一度も失敗はしなかつたヨ。外交に就いては、一つの秘訣があるのだ。

心は明鏡止水の如しと、いふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にもこの極意を、應用して、少しも誤らなかつた。あういふ風に應接して、かういふ風に切り抜けうなど、豫め見込を立て、置くのが、世間の風だけれども、これが一番わるいヨ。おれなどは、何にも考へたり目論見たりするとはせぬ。たゞ一切の思慮を捨て、しまつて、忘想や邪念が、靈智を曇らすとのないやうにしておくばかりだ。即ち所謂明鏡止水のやうに、心を磨き澄ましておくばかりだ。かうして置くど、機に臨み、變に應じて事に處する方策の浮び出ると、恰も影の形に従ひ、響の聲に應

さるが如くなるものだ。それだから、外交に臨んで、他人の意見を聞くなとは、たゞ
く迷ひの種にある許りだ。甲の人の説を聞くと、それが善いやうに思はれ、また乙
の人の説を聞くと、それも善いやうに思はれ、かういふ風になつて、遂には自分の定
見がなくつてしまふ。畢竟、自分の意見であればこそ、自分の腕に運用して力が
あるのだ。人の智慧で動かうとすれば、喰ひ違ひの出来るのは當り前サ。

外交の極意は、誠心實意にあるのだ。胡麻化しなどをやりかけると、却つて向ふから、
こちらの弱點を見抜かれるものだヨ。維新前に岩瀬、川路の諸氏が、米國と條約を
結ぶ時など、五洲の形勢が、諸氏の胸中によく別つて居たといふ譯ではなく、た
い知つた事を知つたとして、知らぬ事を知らぬとし、誠心誠意で以て、國家の爲に
譲られないとは一步も譲らぬ、折れ合ふべきとは、成るべく圓滑に折れ合うたもの
だから、米國公使もつまり、その誠意に感じて、後には向ふから氣の毒になり、相
欺くに忍びないやうになつたのサ。

維新前のある年に、幕府が海軍制度を定める序に、制服をも定めうといふ議が出た。

洋心

某西軍
キツベル

おれは兵式さへ知らぬ中うら、制服などは、まだ不要だとは思つたけれども、おれ
の上には上役もありて、さあさだにおれを嫌つて居る處だらうら、おれも強ひて反對
せず、どもかくも海軍總裁や軍艦奉行などと共に、その頃來て居た英國のアドミラ
ル、キツベルに、制服の事を相談に行つた。このキツベルは、英國海軍の中でも、
なか／＼出来る男で、顔附さうら、談し工合ひまで、頗るやかましい男だつたが、ま
づわれ／＼に向つて、日本海のことを種々聞き始めた。しかし、こちらには、一人も
完全に答への出来るものがなくて、上役の人も、頗る窮した様子だつたから、おれ
も見兼ねて、問に應じて進んで答をして、やうやく日本人の顔を立て、やつた。併
し、之が爲に彼等に輕侮せられて、いよ／＼制服の事を談すと、内海のとさへ、知
らぬ人の多き貴國の海軍に、制服を定めて何にするかと、一本やられて、制服のと
は、一まづ廢止になつた。

その時におれは、キツベル等の高慢が氣に喰はるかつたから、一つ敵を取つてくれ
うと思つて、突然彼に向ひ、貴國の武鑑を見るに、アドミラルが八十人もあるが、

あれは實際かと尋ねたら、彼は得意になつて、實際だと答へた。そこで、おれは笑ひながら、その八十人は、何れも年功で陸進せられた御老人たちで、實地に軍艦を指揮し得られるのではあるまい。實地軍艦を指揮し得られるのは、何人あるか、と推しうへして尋ねたら、彼もまさか八十人揃つて指揮し得るともいひかねて、いや、その段に至つては、拙者と今一人とあるばかりだと答へた。厳しく威しつけられたり、馬鹿にせられたりなどする中に立つて、時々力味を見せるのも、中々苦しかつたヨ。

この制服の事を始めとして、海軍の事は、何もかも外國人が相手だから、おれもこの頃は、随分苦心したヨ。何年だつたか、幕府に伊豆の下田と相摸の觀音崎と、その外二ヶ所ばかりへ、燈明臺を設けうといふ議があつたが、幕府は役人を英、米、佛三國の軍艦へ派遣して、この事に關する相談をさせうとしたけれども、役人共が、饜應の費用を吝みなせして、三國の軍人をうまく待遇せぬから、彼等も不平で、カプテンは一人も相談に來ない。役人も餘儀なく歸つて來たが、また、他の一人を派

遣しても全様であつた。そこで、幕府にも協議の上、とうとうおれを出すことになつて、夜中に使者を、おれの宿へおこして、この談判を命ぜられた。おれは直ぐに出て行つて、まづ費用を少しも吝まず、第一等の御馳走を出し、ろの上で、自分でわざわざ彼等の船へ挨拶に行つたものだから、彼等も頗る満して、早速おれの船へ來て答禮をした。それから、約束通り彼等とおれの船に會して、燈臺設置の商議を遂げたが、さて、茲に困つたのは、彼等がその夜、おれの船へ泊るといふのに、三人の處へ、上等の寢室が、二つより無かつた一條だ。當時英國のカプテンは、テツビヨルドとかいつて、年は若いが、セバストポールの戰に功があつたから、この身分になつたといふ人だ。米國のはゴールドツバラといつて、六十餘りの老人で、佛國のも之と全じ年輩の某だつた。さて、前にいつた通り上等の寢室は、僅に二つで、其の他は、下士官の寢るべき階下の室ばかりだから、おれが若し飽くまで威嚴を保つて、上等室よ寢るとすれば、三人の中の一人は、是非共下士の室に寐させねばならぬ。米國のと佛國のとは老人で、英國のが若いからといつ

ても、彼も英國政府のら、わざ／＼東洋に派遣せられて、とにかく英國を代表して居る人だら、他の老人たちと優劣をつける譯には行かない。且つは不公平な事でもすると、彼等の感情を害して、この商議が破れるかも知れないものだから、おれも断然決心して、三人の者に向ひ、拙者は腹藏なく申上げるが、實はこの船の寢室、かくの次第なれども、君等の中一人を下士の室に遣くといふとも出来ぬわより、主人たる拙者は、下士官室に寝るゆゑ、賓客たる君等は、上等室二つの中、寝られよといつたら、彼等もおれも腹藏のみのを感心して、その御心配には及ばぬものをといつて、おれの厚意を謝した。これで燈臺も關する商議も濟んだが、當時の英國公使パークスも、此始末を聞いて、極て満足に思つたか、其後は、何事もおれを指名して、談判する様になつた。此時分の外交についての苦心は、平生とは随分違つたものサ。今日外交の方針だとか何とかいつて、騒いで居るけれども、全体、何をしどるのか、おれには分らない。飯の上の蠅を逐ふやうな事ばかりやるのに、方針も何も入るものか。世間の人も人だ。西洋に行つて少しばかり洋書が讀め、英語で談判でも出来

れば、古今第一の外交家と仰いで居る。上も下も似たりのものサ。かういふ風では、矢張り幕府の末路と全七やうになるかも知れないから、しつかりやつて貰ひたいものだ。おれなどは、昔のらする奴だによつて、この六疊の室に寝てばかりゐるけれども……。

前にもいつた通り、國民が今少し根氣強くなつては、とても大事業は出来まいヨ。隣の奥さんをいぢめる位を、外交の上乗と心得るやうでは困るヨ。今少し遠大に、而して沈着に願ひたいものだ。

なに事も根氣が本だ。今の人は牛肉だとか、滋養品だとか騒ぐ癖に、根氣は却つて弱いが妙だ。人間の體は、憲法政治ではいけない。睡眠時間が何時間で、働く時間が何時間、食物は朝は何、晩は何と、さう法律づくめにやられては體も困るワイ。人間は活物だから、氣を養ふのが第一サ。氣さへ餒えなければ、食物などはさんでも構はないヨ。今時の人にはこの邊の工夫が必要だ。

近頃は殖民論が大繁昌の様子だが、古人は黙つて居ても、その實を行ひ、今人は矢筈、

くいつても口ばかりだから困るヨ。朝鮮征伐の時に、小西行長が、日本一の猛將加藤清正と競争して、少しも後れを取らなかつたのは、全体行長は、堺浦の木薬屋で、手代が澤山朝鮮に居つて、到る處、形勢は明かす聞かすことが出来、またうの手代共が、土人を導いて行長に従はせたからだ。行長も感心の男サ。

一消一長は、世の常だらうら、日本も支那には勝つたが、しかし、何時かはまた逆運に出會はなければあるまいから、今から其時の覺悟が大切だヨ。うの場合にあつて、わい

くいつても仕方がないサ。

今日の趨勢を察すると、逆運にめぐりあふのも餘り遠くはあるまいヨ。しかし、今の人は大抵、先輩が命がけでやつた仕事のお蔭で、顯要の地位を占めて居るのだから、一度は大危難の局に當つて、試験を受けるのが順序だらうヨ。

支那人は、一体氣分が大きい。日本では、戦争に勝つたといつて、大騒ぎをやつたけれども、支那人は、天子が代らうが、戦争に負けうが、殆ど馬耳東風で、はあ天子が代つたのか、はあ日本が勝つたのかなといつて平氣である。それもその筈サ。一

社会は

つの帝室が亡んで、他の帝室が代らうが、國が亡んで、他國の領分にならうが、一々の社會は、依然として舊態を存じて居るのだからノ。社會といふものは、國家の興亡には少しも關係しないヨ。ともあれ、日本人も餘り戦争に勝つたなどと威張つて居ると、後で大變を目にあふヨ。劍や鐵砲の戦争には勝つても、經濟上の戦争に負けると、國は仕方がなくなるヨ。そして、この經濟上の戦争にかけては、日本人は、とても支那人には及ばないだらうと思ふと、おれは竊に心配するヨ。

地主と
差配人

支那人は、また一國の天子を、差配人同様に見てゐるヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人は幾ら代つても、少しも構はないのだ。それだから、開國以來、十何度も天子の系統が代つたのサ。こんな國體だによつて、戦争をそるには、極めて不便な國だ。それだから日本人も、こなひだの戦争に大勝利を得たのヨ。しかし戦争に負けたのは、たい差配人ばかりで、地主は依然として少しも變らないといふことを忘れてはいけないヨ。

朝鮮といへば、半亡國だとか、貧弱國だとか輕蔑するけれども、おれは朝鮮も既に蘇

生の時機が来て居ると思ふのだ。凡そ全く死んでしまふと、また蘇生するといふ、一國の運命に關する生理法が世の中にある。朝鮮もこれまでは、實に死に瀕して居たのだから、これから屹度蘇生するだらうヨ。これが朝鮮に對するおれの診斷だ。しかし朝鮮を馬鹿にするのも、ただ近來の事だヨ。昔しは、日本文明の種子は、皆朝鮮から輸入したのだから、特に土木事業などは、盡く朝鮮人に教はつたのだ。何時か山梨縣のある處から、石橋の記を作つてくれと頼まれたことがあつたが、その由來記の中に『白衣の神人來りて云々』といふ句があつた。白衣で、そして髯があるなら、疑もなく朝鮮人だらうヨ。この橋の出來たのが、既に數百年前だといふから、數百年も前は、朝鮮人も日本人のお師匠様だつたのサ。今日は、實に上下一致して、東洋の爲に、百年の大計を講じなくてはならぬ時で、國家問題とは、實ふこの事だ。今頃世間で國家問題といつて居るのと、皆を嘘だ。あれは、皆を私の問題だ。

幕府の末に、いろ／＼當局者の頭を痛めたも、畢竟、この國家問題の爲だ。あの頃も、随分やかましかつたが、三十年後の今日も、矢張り昔の通りだ。おれも國家問題の爲に、群議を斥けてまゝつて、徳川氏三百年の幕府をまら棒に振つて顧みなかつた。當時ふは、一身の死生は固より、徳川氏の存亡も眼中にはおかなかつたが、おれの生き残つたのも、徳川氏が七十萬石の大名よなつたのも、今から考へると、まるで一場の夢サ。

* * * * *

おれは、一体文學が大嫌ひだ。詩でも、歌でも、發句でも、皆でたらめだ。何一つ修業したもとはない。學問とても何もしさい。只だあの四五年間、屏居を命ぜられたお蔭で、少々の學問ができた。源氏物語や、色々の和文も、此時に讀んだ。漢學も、この時にした。到頭二十一史も讀み通したヨ。しかし、ほんの獨學で、始終康熙字典と首引をしたのだから、讀も誤つとるかも知れないヨ。音などは偏や作を見てよい加減にやつ附けるのだから、

本當に修業したのは、劍術ばかりだ。全体、おれの内が劍術の家筋だから、おれの親父も、骨折つて修業させうと思つて、當時劍術の指南をして居た島田虎之助といふ人に就けた。此人は、世間なみの擊劍家とは違ふ所があつて、始終、今時みながやり居る劍術は、かたばかりだ。折角の事に、足下は眞正の劍術をやりなさいといつて居た。うれからは島田の塾へ寄宿して、自分で薪水の勞を取つて修業した。寒中になると、島田の指圖に従うて、毎日稽古がとむと、夕方から稽古一枚で、王子權現に行つて夜稽古をした。何時もまづ拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思、心膽を練磨し、然る後、起つて木劍を振りまはし、更にまた元の礎石に腰を掛けて心膽を練磨し、また起つて木劍を振りまはし、かういふ風に夜明まで五六回もやつて、それから歸つて直ぐ朝稽古をやり、夕方にゐると、又た王子權現へ出掛けて、一日も怠らなかつた。

始めは深更に只一人、樹木が森々と茂つて居る社内にあるのだから、なんとなく心が憶して、風の音が凄しく聞え、覺え身毛が豎つて、今にも大木が頭の上に仆れかゝる様に思はれたが、修業の積むに従うて、次第に慣れて來て、後には却つて寂しい中に趣きがある様に思はれた。

時々同門生が二三人はくることもあつたが、寒さと眠さにと避易して、何時も半途から、近傍の百姓家を叩き起して、寐るのが常だつた。併しおれは、馬鹿正直にもうんな事は一度もしなかつた。この修業の効は、忽ち瓦解の前後に顯はれて、あんな艱難辛苦に堪へ得て、少しもひるまなかつた。

はんに此時分には、寒中足袋もはかま、袴一枚で平氣だつた。暑さ寒さといふことは、どんな事やら殆ど知らなかつた。ゑんに身體は、鐵同様だつた。今に此の年にあつて、身體も達者で、アシモト足下も確かに、根氣も丈夫なのは、全く此の時の修業の餘慶だ。

彼の島田と云ふ先生が、劍術の奥意を極めるには、先づ禪學を始めよと勧めた。それで、たしか十九か二十の時であつた。牛島の廣徳寺といふ寺に行つて禪學を始めた。

大勢の坊主と禪堂に坐禪を組んでゐると、和尚が棒を持つて来て、不意に坐禪してゐる者の肩を叩く。すると片端から仰向に顛れる。なに、皆が坐しても、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んでしまつてゐる。そこを叩かれるから、喫驚りしてころげるのだ。おれなんか、始めは此のひつくり反へる連中であつたが段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、只僅か目を開いて視る位の所に達した。

かうして殆んど四ヶ年間、眞面目に修業した。此の坐禪と劍術とが老爺の土臺とゐつて、後年大層爲めになつた、瓦解の時分、萬死の境を出入して、つひに一生を全うしたのは、全く此の二つの功であつた。ある時分、澤山刺客やなんかひやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力とは、必竟此の二つに養はれたのだ。危難に際會して逃られぬ場合と見たら、先づ身命を捨て、かゝつた。而して不思議にも一度も死ななかつた。こゝに精神上の一大作用が存在するのだ。人、一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し胸跳り、措置却て顛倒し、進退度を失はるゝの患を

免れるとは出来ない。若し或は遁れて防禦の地位に立たんと欲せ、忽ち退縮の氣を生じ來りて相手に乗せられる。事、大小となく此の規則に支配せられるのだ。おれは此の人間精神上の作用を悟了して、何時も先づ勝敗の念を度外に置き、虚心坦懷、事變に處した。夫れで小にして刺客、亂暴人の厄を免れ、大にして瓦解前後の難局に處して、綽々として餘地を有つた。是れ必竟、劍術と禪學の二道より得來つた賜であつた。

こゝに、一の面白い話がある。白隠と云ふ一人の禪僧があつた。是は近代の聖僧である。此和尚の寺の門前に、一軒の豆腐屋があつた。其内の娘が、不圖妊娠した。兩親は痛く驚き詰責せると、娘が實はお寺の上人さんと云云して、妊娠だと白狀した。ろこで兩親も大に喜び、御上人様のお胤であるならとて産み落させ、大切に育て上げた。二三年たつと彼の娘が、實にすまないと考へ付て實を吐いた。そこで其子供が白隠の胤でない云ふことが分つた。故に兩親も大に驚き、直ちに寺に至り白隠に向ひ、前後の始末を話し、大にあやまる。すると、白隠はハアソーカと一言

いつたばかりであつた。「ハアソーカ」中々大きなものだ。天下の事、凡て春風の面を拂つて去る如き心胸、此の度胸あつて始て天下の大局に當ることが出来る。

西郷は、流石に此間の消息を解し居た。江戸城受渡の時、一つの美談がある。是は一翁(大久保)から聞いた話だ。あの時には、おれと西郷との談判で、雙方五人づつの委員を選び。城受渡の式をするよとした。西郷も一翁も其一人で、おれは加はらるゝつた。其時は殺氣全都に充滿すと云ふ形勢で、中々油斷が出来あつた。それで城受渡にくる官軍の委員等も非常の警戒で、堂々たる官軍の全權委員の一人が、狼狽の餘り片足に草履をうがちながら、玄關を昇つたと云ふ奇談ものこつて居る位である。此の中に西郷は優然として、少しも平生に異ならせ、實に貫目があつたと云ふとだ。實に驚いたは、城受渡に關する色々の式が始まると、西郷先生居睡りを始めた。此の式がとんで、外の委員が引取るも、猶お先生ふらり〜遣つて居る。とると一翁傍よりたまりかね、西郷さん〜式がとんで皆さんお歸りで御座ると、ゆり起ると先生ハ、ア〜と言つてねとばけ顔を撫でつつ、悠然として歸つて行つたさうだ。一翁

もひどく感心して居た。中々ふとい奴だ。數十日来疲れて居たもんだから、城受渡の間に、いい暇見附けた氣で居睡りとは、恐れ入るではないか。必竟、こゝ等が渠の維新元勳の筆頭に數へらるる所だ、

俳諧といへば、其角堂や夜雪菴などが、おれの處へ来るから、おれも一寸やつて見る氣にあり、幾つも作つたが、茲に一つおれの得意の句がある。それは。

時鳥不如歸遂に蜀魂

とどいぎすすとどいぎすつひにとどいぎす。人生すべてかくの如しサ。少壯のときは、時流に従うて、政黨とか、演説とか、選舉とか、辭職とか、騒ぎたてるが、これは、即ち時鳥だ。しかし、これも一時で、天下の事、意の如くならず、己みぬる哉、己みぬるかな。寧ろ故山に歸りて田地でも耕すがましたと、不平やら失望やら、これが中年から初老の間で、所謂不如歸だ。而して彼是する中には年が寄つて、もう蜀魂だ。つまり、十七文字の間に、人生を一括したのサ。この句を永機に見せたら、どうも先生のは分らないといふら、困つた奴だと今の通り説明して聞かせて

やつた。すると猶も考へて居たが、先生のは、字義が六つかしいといふから、それは字義の講釋などは、聞かなくても見る人にはわかる。芭蕉の句でも見る人の眼識次第で、深遠の意味が自から心に浮んで来る。もし芭蕉がおれの句を見たなら、屹度感心するだらうと威張つてやつたツケ。

其角は、才でとほした人だけれども、芭蕉は、またにらいたつた。その句を味つて見るのに、皆な禪味を帯びてゐて、その人品の高雅を所が想像せられる。そしてその語は、西行の古歌などから取つたものが多く、學問は、中々博かつたやうだ。

『道づたの木槿は馬に喰はれけり』といふ句から思ひついて、おれが、
晝顔のどがまを洩れてさきにけり

と詠んだが、どうだ。『稻妻の行く先見たり不破の關』實に千萬言を重ねても言ひ盡くせぬことを、やとやすと言ひ顯はしてあるが、おれもかうやつた。

稻妻やまたくひまの八一世
それら、まだいくつもあるが、

夜の雪草鞋もぬがで子を思ふ

これ等は、少し調子が卑いから、夜雪庵などにも分るだろう。

車引き車引きつゝ過ぎにけり

これは車夫が、車も随分引いたから、なに商賣を代へやうと思ひつゝも、矢張り車を引いて居て、到頭轉業の機會がなく、それで一生を過す處を詠んだのだが、浮世は皆この通りだ。

米櫃に一夜つかる、老鼠

ふれは、貧乏士族が何か喰ふ道にありつかうと思つて居る内に、自分の身がまづたふれてしまふ。かういふ人は、屢々おれの家へも来るが、恰も老鼠が一夜かゝつて米櫃を噛つて、さて、これから米を喰はうといふ時になつて、體は疲れる、夜は明けるといふのと全じた。どうも今の人がいふ俳諧は、皆を規模が小さくて、小天地の間に踞踏して居るが、おれはいけない。おれは曾て、

雪の峰とぐに向ふは揚子江

と詠んだとがある。詩でも山陽の『雲耶山耶』などは、まだく小さいヨ。

小説も退屈な時には、讀んで見るが、露伴といふ男は、四十歳位か。彼奴アイツなかく學問もあつて、今の小説家には珍しく物識で、少しは深さうだ。聞けば、郡司大尉の弟だといふが、兄弟ながら面白い男だ。

紅葉といふのは才子だ。小説の外にも仕事の出来る奴だ。書いたものに、才氣が現はれて居る。

『むら竹集』を書いた篁村とかいふ男の小説は、近頃一向見えないが、もう種切よなつたのか。それとも又、商賣替でもしたのか。なよ、まだ壯健だと、それでは老い込んだのだらう。

ろれから浪六といふ男があるやうだが、あれの書くのは千篇一律で、何時も俠客ばかりだ。併しそれも腹の無い人間ばかり書くから、これもこれも意味がない。彼奴も遠からず、種切になるだらうヨ。

露伴ばかりは博い。書くものに皆な趣がある。佛書も少しは讀んだらしい。作者は、

何でも腹が廣くなければいかん。

馬琴もおれが小さい時分は、なかく盛んだつたヨ。彼奴も十二三の頃には、見島備庵といふ御典醫の小僧であつて、この時に、初めて作者になる階段を上りそめたのだ。その頃、根岸肥前守といふ人が、三十俵二人口の小祿から立身して、御勘定奉行まで經昇つた。よれ程世渡の上手な人が、隱居の後『耳袋』といふ書物を作つたが、見島とは、懇意な間だから、いつもこの書物を貸して遣ると、その使には、必ず馬琴が來た。ところが思ひさや、馬琴は途中で風呂敷包を解いて、『耳袋』を讀んだと見えて、後年著作をするのに、屢々この事を種にしたといふことだ。また、小説を書いた禮物も貯蓄しておいては、支那小説を買つて讀んだから、彼奴の趣向は、何時も變化がうまい。あの『閑話休題』といふ熟語も、支那小説によく用ひる語だヨ。『八犬傳』は、『水滸傳』を丸抜にしたのだけれど、おれが十七八の時に、あれが初めて出版せられた頃には、非常を評判で、所謂堂々たる大儒者も、之に及ばなかつた。實に絶世の才子だつた。

京傳は、町人だ。その弟の京山も通人で、才子で、よく穿つたことをいつたヨ。種彦は、二百俵の旗下で、高谷彦四郎といつて、漢學も和學もよく出來た。極めて伶俐な人であつたから、奥向へも出入して、幫間の如く、如才なく立ち廻つた。そして古風な事が好きで、やれ近松だとか、やれ西鶴だとか始終騒いで居つた。おれの親父とは、懇意であつたから、折々は遊びに来て、おれを捕まへては、あなた本が好きから私の宅へ来て御覽、いろ／＼小説の考證もあるなどいつたり、また、あなた暇なら小説でも書いたらどうだなどいつて、小説の秘書のやうなものを貸したりした。あの評判の『田舎源氏』は、大奥の事を書いたもので、その頃の大御所様は、妾が四十人、子が六十人といふ程ゐらうであつたから、種彦は、之を材料にして、大御所を、光源氏に見立て、その他、繪組の模様なども、お濱御殿をそのまま書いた所がある。如才が無いから、奥の部屋々々へもはいつて、その事情に精通して居つたと見えて、書いたものが皆な活動して居る。今の小説家は、何故穿ちが下手だらう。諷刺といふことを殆ど知らぬ。たま々々書けば、眞面目で新聞に毒づく位の

事だ。氣が短いのか、それとも又、脳味噌が不足なのか。

馬琴の『八犬傳』も、あれは徳川の末世の事を書いて、つまり不平の氣を漏らしたのだ。一寸みると、なんの意味もないやうだが、その無さうな處が、上手なのサ。京山や、春水なども、本町あたりの大町人の内幕を書いたのだ。

馬琴の諷刺は、ちやうど司馬遷の『史記』の様なもので、褒貶曲折が著るしい。凡そ窮屈な時代には、才の競争で、手を拍つやうな上手な諷刺が多くあるものだ。

姓は今忘れたが、號を金鶏といふ戯作者の味噌摺があつた。味噌摺といふのは、今の批評家の下等の奴サ。金鶏は、まだ二十歳余りの若輩であつたけれど、あか／＼の才物で、たとへば『名人姓名録』といふやうなものを作つて、當代の作者や役者を、鯛だとか鯉だとか、鮒だとか鮭だとか、價打をつけて評するから困る。名譽を好む人は、豫め金品を贈つて、その機嫌を取つて置くといふ始末。その摺物の如きも、早晚お上へ没収せられる覺悟で、二十兩のものをも、早く百兩位に儲けて置いた。それ故お上にも仕方がない。

また、その頃、京都の儒者に東條琴臺といふのがあつた。當時、寺門靜軒の『江戸繁昌記』が非常に評判のよかつたところだから、琴臺も江戸へ出て、一と旗擧げうと思つて、江戸の大家先生を、大勢兩國の萬八へ招いた。御馳走といふ前觸れだから、何れも出席して、席上揮毫だの、課題だのやつた後、足るほど飲み食ひして歸ると、翌朝萬八から、昨夜の割前だといつて、諸入費の頭割を取りよ來た。あれは琴臺の御馳走であつた筈だといふと、琴臺先生は、皆様から頂けと仰つて、今朝既に京都へ御出立をされたといふ。それは一杯喰はされたと思つても、後の祭りだ。かういふ悪戯をしたものもある。そのころの書画會といへば、谷文晁や、渡邊華山なども出て、頗る賑やかさものであつたヨ。

十返舎一九も、なか々の才物で、あれは花川戸の船宿の亭主サ。職が職だら、流石は通人だつたヨ。

そんな風にして、作者が巾を利かしてゐたから、後には水野越前守などのお叱りを受けて、奉行所などへ引かれたものもあつたが、それはその筈だ。

今の人も、文學は元祿よあるといふが、尤の事だ。あの近松門左衛門の如きは知らぬ奴だ。坊主上りださうだが、才は充分あつたヨ。平賀鳩溪も、諷刺は巧みだが、近松には及ばない。近松の淨瑠璃の中に『出世瀧徳』といつて、淀屋辰五郎の事を書いたものがある。その文中に淀屋が豪奢の様を寫して『金の冠、着ぬばかり』と書いたが、それでは朝廷に對して勿体ないといつて、直ぐその次『癩は持病にありとがよ』とやつた所は、實に名文だ。笏を癩に代へた所などは、實に才子だ。なか／＼うまい諷刺ではないか。尤もこの頃は、田沼時代だから、作者も時勢が癩にさはつて、畢竟、あれで不平を洩したのサ。昔しの作者は、すべてそんな遣り方だから、旗下にも學者にも、皆な好評を得たのだ。

今の小説は、西洋のをも加味して、昔し物を焼直すから、廣いことは廣いけれど、淺くつていけない。昔まの小説を讀むと、その時勢がさうるけれど、今の小説では、今の時勢は、決してわからない。ろくに諷刺が淺はかで、すぐに人を怒らせるまゝは、餘り智慧がないではないか。露伴などが、今少し年をとると好からう。書いた

もので見ると、あいつ中々ぬらい。そして経歴もあるらしい。まづ今日では露伴が一等だ。

ふれの處へは、封間や、遊人や、藝人が澤山やつて来るヨ。藝人などは、無心で熟練した結果、一道の悟りを得たものが多い。併し自分では、その事を覺えぬいけれども、おれがそれを推察して説明して聞かすと、彼等は何れも驚いて、おれをひどく炯眼だといふヨ。近頃の人は、皆自分でぬらがり、議論ばかりしてうるさくて仕方がない。それゆゑ、理窟を書いたものを讀むと肝癢に障るから、たゞ人情本や、古書などを讀んでゐるヨ。何時か作つた文がある。

先哲の書を見る詞

元和偃武以來國內の趨勢漸く文化に向ひ、豪傑英俊の士等文學に従事す。元祿前後に到て、殊に傑出の輩不少、或は經綸の才識を具備せし者、或は高踏超凡ある者、或は往昔の古調を脩むる者、或は印度の古義を明解する者、其他みま不撓の精神を以て、其道を自得し、有爲の學者たるに不耻、我が殊に賞賛數輩、今にし

てその人不可見といへども、其手澤の存せる者を以て、幽鬱無聊の時に於て展覽、古人の境遇如何を追懷すれば、不言中胸懷の快然たるを覺ゆる也。

安房

* * * * *

人間の精根には限りがあるから、餘り多く讀書や學問に力を用ひると、勢ひ實務の方には疎くなる筈だ。學者必ずしも迂濶なのではない。その迂濶なのは、力が及ばないからだ。

おれは何時か中村敬宇といつたことがあるヨ。れ前等を大切にするのは、失敬の比喩だが、ちやうど金箔の附いた書物を大切にすると全じだ。塵を着け走、下ふも置かず、随分尊重はするけれども、さて實際の場合には、おれは決してお前等の教を受けようとは思はないヨ。憚りながら實務のことは、おれの見るところがあるから、必ずしも古人に法らず、必ずしも書籍に質さず、事に應じ變に處して、筈開いて豆塵ち、水流

中村敬宇

れて渠成る的作用があるのだといつた事があつたツケ。

人には餘裕といふものが無くては、とても大事の出来ないヨ。昔から兎も角も一方の大將とか、一番槍の功名者とかいふ者は、假令どんる風に見えても、その裏の方から覗いて見ると、ちやんと分相應に餘裕を備へてゐた者だヨ。今の人達に、この餘裕を持つてゐるものが何處にあるか。人は随分澤山ある様に見える世の中だけれども、おれの眼には、頓と見えないヨ。皆無だヨ。うれを思ふと西郷が憫されるのサ。彼れは常に謂つて居たヨ。『人間一人前の仕事といふものは、高が知れどる』といつてゐたヨ。

どうだ。餘裕といふものは、此處だヨ。幾ら蚤捕眼で、天下の大機を見たとして、観えるものではないヨ。幾ら物事に齷齪して働いても、仕事の成就するものではないヨ。功名を爲うと云ふ者には、とてを功名は出来ない。屹度戦に勝たうと云ふものには、中々勝戦は出来ない。これ等は、つまり、無理があるからいけないのだ。詮じつめれば、餘裕がないからの事ヨ。

君等には見えないか。大きな体をして、小さい事に心配し、あげくの果に煩悶して居るものが、世の中に随分多いではないか。駄目だヨ。彼等には、とても天下の大事は出来ない。つまり、物事を餘り大きく見るからいけないのだ。物事を自分の思慮の裡に畳みこむ事が出来ないから、あの通り心配した果てが煩悶となつて、壽命も何も縮めてしまふのだ。全体、自分が物事を呑み込まなければならぬのに、却つて物事の方から呑まれてしまふから仕方がない。これも矢張り餘裕がないからの事だ。

何事をするにも、無我の境に入らなければいけないヨ。悟道徹底の極は、唯だ無我の二字に外ならずサ。幾ら禪で鍊り上げてても、なか／＼さうは行かないヨ。さうと云ふと、大抵の者が紊れて仕舞ふものだよ。

切りむと太刀の下こそ地獄なれ

踏みてみ行けば後は極樂

とは昔も劍客のいつた事だ。歌の文句は、まづいけれども、無我の妙諦は、つまり、

この裡に潜んで居るのだ。

餘裕、思慮、膽力をいづつても、併しこれはその人の天分だ。天分といふものは、争はれないものだ。れれも十七、十八、十九、血氣盛りのこの三年の間、擊劍の修業を爲た時に、いろ／＼禪で鍊つて見たがの、おれの修業は、大層役に立つた。無爲にして閑寂ちるといふことは、大に爲すあつて、然る後に遣るべきものか。おれは少し感ふが、併し今の人は、何故こんなに擾々として、自から事を爲さうとせざるものが多いだらう。

何事も知らない風をして、獨り局外に超然として居りながら、而かも能く大局を制する手腕のあつたのは、近代では只だ西郷一人だ。世が文明になると、皆が神經過敏になつて、馬鹿の真似などは出来なくなるから困る。

主義といひ、道といつて、必是れのみと断定するのは、おれは昔から好まない。單に道といつても、道には大小厚薄濃淡の差がある。然るにその一を揚げて他を排斥するのは、おれの取らぬ所だ。人が來て囂々とおれを責める時には、おれはさう

だらうと答へて置いて争はぬ。そして後から精密に考へてその大小を比較し、この上にも更に上があるだらうと想ふと、實は愉快で堪へられない。もし我が守る所が大道であるから、他の小道は小道として放つて置けばよいではないか。智慧の研究は、棺の蓋をまるときに終るのだ。かういふ考を始終持つてゐると實に面白う。世の氣運が一轉するには自から時機がある。昔し西洋人は七の數を以て之を論ぜると聞いたが、これを真だらう。何時か、おれはかういふ文を作つた。

人心漸く移轉せんとする前、先づその機動くの兆顯然として生ぜ。機先轉じて漸く顯著ならんとす。此際人心穩やかならず、論争紛々、彼我得失を争ひ、誹謗百出、舊守改良を論ぜるもの三四年、或は五六年究極なきを、或は有力者あれば其説に附和雷同して團結の勢を生ず。

氣運といふものは、實に恐るべきものだ、西郷でも、木戸でも、大久保でも、個人としては、別に驚く程の人物でもなかつたけれど、彼等は、王政維新といふ氣運に乗じてきたから、おれも到頭閉口したのだ。併し氣運の潮勢が、次第に靜まるにつれ

て、人物の價も通常に復し、非常にえらくみえた人も、案外小さくなるものサ。
人はどんなものでも決して捨つべきものではない。如何に役に立たぬと云つても、必ず
何の一得はあるものだ。これにこれまで何十年間の經驗によつて、この事のいよく
間違ひないのを悟つたヨ。

人を集めて黨を作るのは、一つの私ではないかと、それは早くより疑つてゐるヨ。人
は皆さまざまにその長ざる所、信ぜる所を行へばよいのサ。社會は大きいから、あ
らゆるものを包容して毫も不都合ない。卑近の例だが、酒屋も餅屋も、慈善家も
高利貸も、差別なく貸家に住ませてよいと全じだ。大屋はたい屋賃を取り、適當に
監督すれば、それでよいのサ。世の中の事でもたい機會と着手と、この二つをさへ
誤らなければ、なに物でも放任して置いて差支はない。

おれは、一体日本の名勝や絶景は嫌ひだ。昔な規模が小さくてよくない。試に支那へ行
つて揚子河口に臨むと、實に大海のやうに思はれる。又た、米國へ行つて金門にはい
つても氣分が清々とする。國が小さければ、景色も小さく、人間の心も小さい。舊幕

國を金

時代でも、御改革とか御儉約とかいふと、一番早く結果の顯はれるのは、小大名だ。
大々名ほど手間がとれる。支那などは、何時何をするのか、別に目にはつかないけ
れど、何かやつて居るに相違ないのだ。この日本は、全体誰が背負ふかといふに、
まづ國會だらう。而してこの國會を、少しの金で如何やうにもあるではないか。寢
どぼけて居る時勢後れの實業家おとら、左右せられるではないか。そんな小さい膽
玉では、仕方がないワイ。

併し日光は稍々規模が大きいから、歐米の土地を踏んで來た人に見せても決して耻
づかしくない。將來屹度繁昌するだらうヨ。土地の人も、繁昌すれば火事の恐れが
あると思つて、先年數萬坪の公園を作つたが、石碑の、その公園の真中にあるのだ。
文も字も皆なおれの手際だ。字体は竹添などが調べてくれたが、書き慣れぬ字だか
ら、中々骨が折れたヨ。石は石の巻の産だが、こんな大きな石は決して他にないさ
うだ。特別の汽車で送つたのだが、建立までには大かた七千人も人夫を使つたであ
らうヨ。人間の方も集めると大したものサ。(かくて碑面の石摺を示さる。その大さ

世の中に不足をいふものや、不平をいふものが始終絶えぬのと、一概にわるくも悪い。定見深睡といふ諺がある。これは西洋の翻譯語だが、人間はとにかく今日の是は、明日の非、明日の非は、明後日の是といふ風に、一時も休まざり進歩すべきものだ。苟くも之で澤山といふ考でも起つたら、それは所謂深睡で、進歩といふことは、忽ち止まると戒めたのだ。

實にこの通りで、世の中も、平穩無事ばかりでよいけない。少しは不平とか、不足とか騒ぐもののある方がよい。是れも世間進歩の一助だ。一個人についても、その通りだ。おれなごも、始終、徒らに暮らすといふことは決してない。併し世間の人の様よ、内閣でも乗り取らうといふ風な野心はない。おだ折角人間に生れたからは、その義務として、進むべき所まで進むらうと思つて、始終研究して居るのサ。

世の中は議論ばかりで、行かない。實行が第一だ。國が亂れて來たら、誰がこの日本を背負ふだらう。國が亂ると、金が入用だから、今の内に金を貯へるのが大切だ。併し餘り急ると邪魔が出るから、何時松を植ゑたか、杉を植ゑたか、目立ないやうな百年の大計を立てるが必要だ。

凡そ一家の風波といふものは、金から起るのだ。五六年前の相馬家だつて、もし無産の家ならば、あんな大騒動も起らなかつたであらうに。金があつたが悪かつたのサ。舊華族の失敗は、大抵家令家扶が本になり、新華族の失敗は、主人自から之を招くのが多い。そこへ持て行くと、流石は徳川氏だ。門葉殆ど天下に遍しといふ程だけれども、宗家をはじめ、分家の末に至るまで、未だ甚しき風波のないのはまづ目出度いのサ。

昔には、すべての事が眞面目で、本氣で、ろして一生懸命であつた。なか／＼今の様に、首先ばかりで、智慧の出しくらべするのど違つて居た。何人も万一罷り違つたら、自分の身體を投げ出す覺悟で仕事をした。功勞なら、人のものまで自分ののだといひ、過失なら、自分のものまで人のだといふ様な事、流行らなかつた

躬から手を下さずと人がするまゝに任し、自から我が功を立てると人に功を立てさず
る程、氣樂な事は、またと天下にあるまいヨ。

一。身の榮辱を忘れ、世間の毀譽を顧みなくつて、そして自から信じる所を斷行する人が
あるなら、世の中では、たとへ、その人を大悪人といはうが、大奸物といはうが、それ
はうの人よ與するヨ。つまり大事業を仕遂げる位の人、却つて世間からは悪くいは
れるものサ。おれなども、一時ハ大悪人とか、大奸物とかいはれたツケ。併し、この
間の消息が分かる人は甚だ少ないヨ。

死を懼れる人間は、勿論談すに足りないけれども、死を急ぐ人も、また決して譽めら
れないヨ。日本人と、一体ハ神經過敏だから、必ず死を急ぐか、又は、死を懼れる
ものばかりだ。こんな人間は、共に天下の大事を語るに足らな

元龜天正の間は、實に日本武士の花だつた。併し當時に、たゞ死を輕んぶるばかり
を、武士の本領とするやうな一種の教育が行はれて、遂には一般の風が、事に臨んで

死を急ぐ

死を急ぎ、とにかくに一身を潔うするのを以て、人間の能事が了つたとするやうに
なつたのは、實に惜しいものだ。

萬般の責任を一人で引き受けて、非常な艱難にも堪へ忍び、そして縛々として餘裕
があるよ云ふこと、大人物でなくては出来ない。こんな境遇に居つては、その胸
中の煩悶は、死ぬるよりも苦しいヨ。併しそれが苦しいといつて、事局の如何をも顧

みず、自分の責任をも思はず、自殺でもして當座の苦みを免れようとするのハ、畢竟、
その人の腕が鈍くて、愛國愛民の誠がないのだ、即ち所謂屑々たる小人だ。

かういふ風な潔癖と短氣とが、日本人の精神を支配したものであるから、その五百年が
間の歴史上に、逆境に處して、平氣で始末をつけるだけの腕のあるものを求めても、
おれの氣に入るものは、一人もない。併し強ひて求めると、まわ大石良雄と。山中
鹿之助との二人サ。山中鹿之助が、貧弱の小國を以て、凡庸の主人を奉じ、屢々失
敗して、まどく奮發し、斃れるまでは、己めなかつたとや、大石良雄が、若い者
の議論を壓へて、容易に城を明け渡し、山科の月を眺めたり、祇園の花に酔うたり

などして、復讐の念は、何處へか忘れさやうであつたけれども、遂に四十七士を糾合して、見事に目的を達した事などは、かの世間の少しの事に失望して自殺したり、又は歲月と宴安とに志氣を失つてしまつたりする奴どの、大した違ひだ。

支那は、流石に大國だ。その國民に一種氣長く大きな所があるのは、なかく短氣な日本人などは及ばないヨ。たとへば、日清戦争の時分に、丁汝昌が、死に處して従容迫らなかつたなどは、實に支那人の美風だ。

この美風は、万事の上に顯れて居る。例の日清戦争の時にも、北洋艦隊は、全滅せられ、旅順口や、威海衛などの要害の地は、悉く日本人の手は落ちて、彼の國民は、一向平氣で、少しも驚かなかつたが、人はその無神經なのを笑ふけれども、大國民の氣風は、却つてこの中に認められるのだ。

丁汝昌も、何時かおれに謂つたことがあつた。我國は、貴國に較べると、萬事につけて進歩は鈍いけれど、その代り、一度動き初めると、決して退歩はしないといつたが、支那の恐るべき所は、實にこの邊にあるのだ。こなひだの戦争には、う勝つて

つたけれども、彼是の長所短所を考へ合はして見ると、それは將來のとを案じるヨ。顧みれば、幕末の風雲に乗じて起り、死生の境に出入りをして、その心膽を鍊り、窮厄の域に浮き沈みして、その清節を磨き、つひに王政維新の大業を仕遂げた元勳は、既に土になつて、今はその子分共が、政治を執つては居るけれども、今、十年も後の國政を料理する責任は、現在學校などに居る書生の肩にあるのだ。どうだ、今の書生の中に、この大責任に堪へるだけのものがあるか。

おれの見た所では、今の書生輩は、たい一科の學問を修めて、多少智慧がつけば、それで満足してしまつて、更に進んで世間の風霜に打たれ、人生の酸味を嘗めうといふ程の勇氣を以て居るものは、少ない様だ。こんな人間では、とても十年後の難局に當つて、さばきを付けるだけのとは出來まい。おれはこんな事を思ふと心配であらういヨ。

天下は、大活物だ。區々たる死學問や、小智識では、とても治めて行くとは出來ない。世間の風霜に打たれ、人生の酸味を嘗め、世態の妙を穿ち、人情の微を究め

て、然る後、共に經世の要務を談せるとが出来るのだ。小學問や、小才智を鼻に掛け

るやうな天狗先生は、仕方がない。それ故に、後進の書生等は、机上の學問ばかりに凝らず、更に人間萬事に就いて學び、その中に存せる一種のいふべからざる妙味を嚼みしめて、然る後に、机上の學問を活用する方法を考へ、又た一方には、心膽を練つて、確乎不拔の大節を立てるやうに心掛けるがよい。かくしてこそ、始めて十年後の難局に處して、誤らないだけの人物となれるのだ。

かへそ、後進の書生に望むのは、奮つてその身を世間の風浪に投じて、浮ぶか沈むか、生きるか死ぬるかの處まで泳いで見るとだ。この試験に落第するやうなもの、到底仕方がないサ。

天保飢饉

天保の大飢饉の時には、それは毎日拂曉よ起きて、劍術の稽古に行く前に、徳利搗といふをやつたヨ。これは、徳利の中へ玄米五合ばかりを入れて、その口へはいる程に削つた檜の棒で、こつこつ搗くのサ。おれは毎朝掌に豆の出来るを搗いて、

之を篩でれるし、自から炊いで父母に供したことがあるヨ。これは、白米は高くても買はれず、且は玄米にすると、糠や粉米が出来るから、小身者の皆とることだ。世間には、また、かういふ風にした米の研ぎ汁を貰ひに来る細民もあつたヨ。併し徳利搗にはおれも閉口したツケ。

當時幕府では、上野廣小路へ救小屋を設けて、貧民を救助したが、餓學路に横はるといふとは、此時實際にあつたヨ。又、幕府は淺草の米庫を開いて、粃を貧民に頒けたが、その時、最も古いのは、六十年前の粃で、其の色が眞赤だつたヨ。それより下りて五十年前位のは、隨分澤山あつたツケ。赤土一升を、水三升で溶いて、之を布の上に厚く敷いて、天日に曝し、乾いてから、生麩の粉などを入れて團子を作り、又た松の樹の薄皮を剥いで、鯛のやうにして、食物にしたのも此時だ。おれもこの土團子を喰つて見たが、隨分喰へば喰はれたヨ。併し、餘り澤山食ふと、黃疸の様な顔色になるといふとだつた。

又さし搗といふのもやつたとがある。これは一番米が減らないヨ。元來おれは、貧

乏だつたから、自分で玄米を買つて来て、そしてこのさし搗をやつたのサ。この頃は、妻と二人暮しだつたから、妻が病氣でもした時には、れれは味噌漉を下げて、自分で魚や香の物を買ひに行たともあるヨ。今の若い者等が、時にはおれの處へ来て、無心をいふから、その時はれれの昔話をして聞かせるとノ、それでは飯が食へませんといふヨ。まあ呆れるではないか。

人間生きて居るほど、面倒臭いものはない。それならといつて、眞逆首をくゝつて死ぬる譯にも行かず。伯爵の華族様が、縊死したとでも新聞に出されると耻だからノ。

以五語録



翁の書齋を海舟書屋と號す。壁間加藤主計頭の古幅を懸く。翁、常にいふ、主計頭戰國

の間に生れて、而かも這般緯々の餘裕あり。今人太平の世に當りて、なれ且つ生涯煩悶する者、寧ろ耻づべからずやと。古幅の文に曰はく、

霖雨之處定めて御徒然に可有之と致推察候然者先達而中藝州より到來之雪舟眞山

水大横物殊之外珍しく存候依て嵯峨別荘に於而茶會相催候間御來臨待入候不備

月の歌 一首

影清き月の鏡のくもらめや

名は塵の世の秋うつるとも

五月一日

肥後守清正 花押

堀 久太郎殿

明治十一年の末、翁、維新の際に万艱を排して國事を處理せしことを追懷して、今昔の感に堪へざるものあり。乃ち自から筆を執りて『斷腸の記』一篇を著はす。今、その數節を左よ掲ぐ。翁の談話と併觀參照せば、當時の情勢眼前に歴然たらん。

慶應戊辰年三月高輪薩邸に於て西郷へ談判の記

是我一生の難事なり。十五日、官軍江戸城侵撃と云ふ。其畧三道の兵、必死を期し進めば、其後路の市街を焼き、退去の念を絶たしめ、城地に向ひて其死を期せしむ。今日我歎願を聞かば、猶ほ其策を擧げて決戦なさんとせば、城地灰燼無辜の死、數百萬、終ひに遁れしむる能はず。彼れ、此の暴擧を以て我に對せば、我も亦た彼が進むに先んじ、市街を焼き、其進軍を妨げ、一戰焦土を期せずんばあるべからば。此意を決して此策を設け、今日の逢對、誠意に出づるにあらざれば、恐らく貫徹なし難からん歟。愚不肖、是に任じ、一點疑を存せず。若し百萬の生靈を救ふふあらざれば、我先づ是を殺さんと斷然決心して、其策を回す。我西郷氏へ此趣意談判の末、同人靜かみ答へて云ふ、此談判の決答、一人にて決する能はば。今日府中へ出立、督府へ言上すべし。又、明日進撃の令ありと云つて、村田新八、桐野利秋を呼び、見合せの趣旨を述べ、從容平素の如く他談に及び、毫も大事に臨むの体なく、面色溫和、一別以來の事を述べ、餘事に及ぶ。我心中竊かに驚く。襟致寛大、一點の私念を挾まず。嗚呼、今日ある實に此人の意

匠に出づるなど。高輪より入城迄、途中狙撃に逢ふ。彈丸頭上を飛ぶと三回、幸ひにして中らず。

慶應戊辰年四月十一日江戸城引渡附慶喜公へ言上の記

我江戸城引渡し之事、四月十一日を卜す。十日夕刻、池上本門寺先鋒惣督に談判し、直ちに上野大慈院に到り、其顛末を上言す。是れ主公謹慎の院也。院内、疊六ひらの小室なり。主公、當正月已來、未だかつて安眠飽食一日もあらば、面貌枯瘦を見る。我其胸裏を思ひ、少隙を見て顛末を述べ、少しく降心あらむを思ふが故なり。此時、君上我に向ひ仰せて曰く、嗚呼、危哉々々。若し如此ならば、災害足下に生ぜん。如何ぞ諸官に告げ、市民に觸れ、兵隊を警め、人選して其不虞に備へざる。汝が處置、甚だ粗暴にして大膽なり。且つ談判其順序を不得、今にして如何せん。我心裏を貫かば、て斃れんかど。血涙如雨。我れ是れを伺ひて心膽共に碎け、腰足麻痺せり。忽として悟る所あり。回答して曰く、嗚呼、君上の言誤てり。二月御決心の際、大事を任する人なく、我れ微力爲すあらざるを以

三月十四日

弘文館

池上本門寺

引渡し

慶喜の

怒言

て御受に及ばせ。然るに、強てどの命、終に今日に及ぶ。其時上言を、今日より後ち大難事或は大變に及ぶとも、決して上言御指令を用ひざるなりと。主公仰せに素より然りの言あり。今日にして言上するものは、主公の御胸裏を恐察し、黙止する能はざるに因るが爲めなり。府下百万の民、生死之分、今一日に臨む。我れ今日敢て恐懼の念あらむ哉と。且つ申し且つ罵し、席を起ちて城外に向ふ。此際の愁苦、誰にか告げ、誰にか語らん。此時の實際、城内の事、并に官軍の舉動、万般を擔當せり。今にして當時を回想すれば、是れ夢中の大夢、我が天壽を縮す。幾歲歟不可測なり。

慶應戊辰年自記一章

慶應戊辰之變は、我が終身の愁苦、危険慘憺の極なり。奉命より己來、是等は胸中に謀るといへども、身、匪弱、膽識不足、其愁苦小狼狽す。勉勵して説諭辨解すれども、衆人我心裡を察せせ。疑念甚敷、薩長二藩の爲に遊説するの疑固く、出れば、途上に覘ひ討たんとし、入れは激論殺害せんとす。或は憤激して是を叱し、

或は諭して是を退かしむ。今日の愁苦、孰にか告げ、孰れふか訴へむ。唯だ一片之精神、不欺の志を以て、死するも自から泉下に愧るなきを期するのみ。

昔、大坂の役、片桐且元其中間に居て、百變千化、幼主を補弼す。其苦况、凡庸の及ぶ所にあらず。然れ共、時の諸臣、其忠諫に従はず。千慮萬苦、終に水泡となり、隨て豊臣氏の社稷を滅せ。我れ今日の事に處して、其愁苦を察す。省るに、古人に及ばざると萬々。如何ぞ我徳川氏をして全きを得せしむ。是を知て退かざるは、頗る愚なりといへども、思ふに我徳川歴代渥恩之名族、近日の大變に逢うて、其方向を失し、一も大義に苦慮盡力し、死してやまむとせる者なきは、獨り是等の辱まわらず、我が君家の耻辱、後世是を如何にいひむ。譬へば、一身八裂、溝壑に擲たるも、亦た顧るに暇なきものあり。亦た悲しからむや。

悲風慘憺の小記二章

嗚呼、崇論高議して實際に拙く、同屬相喰で、國財海外に出るが如き、是れ東洋諸洲の免がれ難きの政畧なり。吾人之を明悉せれども、止むる能はせ。今後亦如

何不可知。後賢能く注目再誤なく、邦家をして貧困危難に臨せしむる勿れ。我れ悲惨難危に遭遇す。其初多く一身に關す。中歳お及びては、多く政機より發す。其末路に到りては、邦家の機に關す。何ぞ其遭遇之奇なる。唯だ歎息をべきは、我質、下愚にして、知恵に乏しく、真勇之膽なく、務め勵みて忍耐する而已。故に執事活潑圓滑の跡なく、心膽缺乏、筋骨空敷枯瘦し、終に萬衆一笑の資に不過。嗚呼、誠に可憐。唯だ我に等しき者は、老鶯鞭影に恐れ、重荷を負駄し、終日汲々奔走し、終に笞鞭の下に斃れて毫も憐れひ人なきと、何ぞ夫れ異ならむ。

翁が幕末より、明治の初年に涉りて、海軍の軍務に執掌し、以て我が國海軍の基礎を作らることは、緒言中、既に之をいへり。左は即ち翁の自著に係る『海軍歴史』の跋文也。

往時海軍の事を回顧すれば、流涕すべきあり、怒罵すべきあり、又た嗤笑すべきあり。真に兒戯に類すと謂て可ならん。然りと雖共土壤山を爲し、涓滴海を成す。今日の基址を爲もの、豈、其一簣半勺の功なしと謂んや。今我此史を編する、欣

海軍歴史

然として自から任せる所あり。况んや當時我と共に其事に與れる人尙は存するあり。而して文書の徵す可きもの、未だ全く泯びざるあるをや。其校勘排次は、之を木村芥舟、伴鐵太郎に托し、圖書採蒐及鈔寫の如きは、櫻井貞、山下文齋に囑す。凡八閱月にして成る。諸子勉矣。皆舊時同局の遺老なり。

明治廿一年十二月

勝安芳記

明治廿一年八月廿日、芝、増上寺に十四代將軍家茂公（昭徳院）の法會を營む。時に翁、左の文を靈前に奉讀す。

舊臣勝安芳昭徳公靈前に慚愧口演

安政五午年、將軍御繼統前後より、邦内益々紛擾。萬延三亥年、上洛之御事あり。此際哉、京攝之間、壯士充滿、我が將軍の舉動を窺ひ、大舉争鬪せんとせ、其勢甚た危険なり。初めて御參内之節の如き、我が臣僚不虞を思ひ、痛心焦思甚敷、閣老板倉伊賀守機密之臣に謀り、利匕首を製し、參内の時に當りて、密かに臣僚之痛心を述べ、隱に懷にせられんとを希ふ。將軍之を聞て仰せて云、不肖朝家に

對し、一點怨望を抱かず。然るに、隱密戒心を抱藏なすが如き、是れ何等の事ぞ。汝等予か胸中を不察也と。終ひに其願を用ひず。嗚呼、當時の密議實情如此。此一事を以て、將軍の誠意、其真心に發するの跡明々、竊かに敬服賛歎に堪へざるなり。我か官吏、此寛大誠實なる將軍の胸裏を心とし、是を擴充して以て邦内向て大小事を所置せば、百奸千謀ありといへども、何をか恐れ、何をか愧ぢむ。然らずして、小忠唯德川氏を思ふに切、政府と一家の別なく、終に識見執事狹小に陥り、英意を達せる能はずして、將軍其世を終り玉ふ。誠に悲哀に堪へざるなり。此時之情體を顧みれば、邦内有志と稱呼せる者數を増し、激昂して幕吏を厭ひ、門閥を破り、吏を殺戮せんとと。今にして其形勢言ふ可からず。星移りて今年廿七閱歳、今哉、形勢古に異にして、文明を唱ふれども、邦内猶ほ古の如く、藩閥を破り、官吏を忌憎し、一團結して是を攻撃せんとと。官吏も亦た暗々裏に團結し、藩閥益固く、昔時幕吏の攻撃よりして合力其位置を保ちし如く、同一轍に出でざるなり。臣安芳、猶不敬を冒し、將軍の靈前に拜告す。邦内の多故、將軍在

世の時より甚敷、其跡大に昔時に反するも、人心の激昂情實に到りては、昔時に異ならざる此の如し。將軍當時の政機、少誤なくして苦慮深く、終ひよ此れが爲め薨逝せられ、御跡益々亂る。是我輩臣僚の爲政、誤謬不可遁と彰々乎。唯ぞ希ふ、將軍の子孫一門、將軍初參内の英意を體認し、是を擴充して將軍の意小叛せざらんとと。舊臣老朽、涙を濺ぎ舊感に堪へず。今日墓前に拜伏し、昔時之形勢を顧み、當今の情實を畧述し、昔日我輩の無狀遁れざるを慚愧し、尊靈に奉謝する如此。是れ一片之微志也。恐懼謹言。

明治二十一年八月二十日

舊臣 勝 安芳

ある人、翁を訪うて日光の風致美觀を論ず。翁曰はく、余、未だ日光を知らず。客、驚いて曰はく、閣下の一身は、德川氏の藩鎮に非ざるや。維新の當時より、以て今日に至るまで、德川氏の安危は、實に閣下の肩上にあり。而かも閣下が德川氏の祖厝を知らざるとは、抑も奇といふべし。翁曰はく、余は實未だ日光を知らず、また未だ久能山を知らず。ふれ蓋し故あるなり。維新の際、余、微賤より起りて、德川氏

の興亡を一身に擔ふ。余、不肖と雖も、苟くも官軍に抗せば、薩長の兵、豈、容易に江戸城に入るとを得んや。ただ主家をして賊名を蒙らしむると、無辜の生民を塗炭に苦ましむるとは、余の固より欲せざる所なるより、彼が如くに恭順の意を表したり。是においてか、徳川氏は、嘗に罪名を免れたるのみならず、また七十萬石の高祿を賜はりしかど、余が心は、なや安んずべきも非き。若し徳川氏の門流、將來において無謀の徒を出すが如きとあらば、余、豈、何の面目を以て、上は 天皇に對し、また徳川氏の祖宗に對するを得んや。されば、余は維新以來、常に戰々競々として、天下の形勢に眼を注ぎ、未だ安んじて祖席に謁するの時機を得ざりき。然れども、今や王澤遠近に洽く、天下の形勢、また余の杞憂を須ひざるに至れり。故に、余も亦早晚行いて東照公の靈を拜せんと欲す。 (その後、翁は明治廿七年を以て日光に詣りしと次項に見ゆ)

翁遂に明治二十七年の、老体自から日光に詣りて、古代九谷燒表黒地に金葵紋、付内金地の神酒壺一對、蒙古兜一個、金地厚紙に菊花を寫せるもの十六枚、及び

自から奉書紙に認めたる

前將軍に代りてよめる

物部安芳

國の爲民の爲とてすてし身の

そのまごゝるはかみやしるらん

の和歌を東照宮に奉り、尾形光琳画『千羽鶴』の幅を大猷公席に奉り、また、谷文晁画『三哲圖』一幅と

むら雲はあとなくはれて下野や

二荒の山にをめる月影

の和歌とを二荒山神社に奉る。また、この時、特子、翁の爲に開ける、保晃會の宴席に臨みて、一同に贈るに、酒肴料金五拾圓と、左の和歌とを以てせり。曰く、

保晃會員つとめたるをよみして

物部安芳

もろ人の心の色を見よやとて

みやまの木々は紅葉しぬらん

保晃會は、伯に贈るに、一個の手篋を以てせり。手篋は、前年大會の決議にとりて調製せし所。全体黒檀より成り、高時繪せる蓋の表には、先年建設せし保晃會碑を畫き、裏には、日光神橋の圖を寫せるものにして、頗る優美高尚の品ありといふ。翁、曾て大鵬下界を耽視しつゝ、高翔せる圖を畫く。落筆の間に、慨世の氣、躍々たり。自のら題して曰はく、

北○溟○垂○天○翼

高○翔○大○東○洋

一○啄○鷄○林○肉

再○啄○群○島○梁

水○や○空○く○ぬ○ち○も○わ○か○ぬ○北○の○海○に

羽○を○の○ぞ○鳥○は○何○あ○さ○る○らん

待書
赤城某

翁、壯時蘭書を研究するに、辭書の世に印行せられたるもの當時僅に一種、而かも大部にして、その價は六十兩といふ。小身の士人は、容易に之を得べくもならず。されど、翁は如何にもして之を得んと百方盡力し、漸く蘭醫赤城某が秘藏せしを、一ヶ年十兩の謝料にて借り受け、それより晝夜之が謄寫に従事し、漸くにして一部を

了りしも、謝料及び用紙等の諸費を辨せる能はざるより、更に一部を寫し、之を他よ賣却して、その費に充てたり。その後、翁、榮達して辭書は、久しく篋底に埋り、蠹魚の蝕る所となりしを、ある人大に惜み、翁に勸めて表装を加へ、今は翁の座右にありて、その手澤の一とはなれり。辭書大冊五六卷、卷末に、翁が當年手書せし記あり。以て翁が壯時苦學の狀を推想をべく、又、以て英雄の行事細大兼ね至らざるなきを知るべし。記に曰はく、

弘化四丁未秋業に就き翌仲秋二日終業予此の時貧骨に到り夏夜無幘冬夜無衾唯日夜机に倚て眠る加之大母病氣に在り諸妹幼弱不解事自から椽を破り柱を割て炊ぐ、困難到于爰又感激を生じ一歲中二部の謄寫成る其の一部は他に鬻ぎ其の諸費を辨せ嗚呼此の後の學業其の成否の如き不可知不可期也

勝義邦記

翁の舊製に、その終身の史詩ともいふべき者あり。曰はく、

逆○境○五○十○年

浮○沈○官○海○中

狂○濤○日○夜○起

暗○雲○掩○大○東

我○生○奮○力○剛

元○氣○四○方○充

試○我○以○艱○厄

鞅○掌○心○忡○々

經營變遷際

鍛鍊自相攻

悟了非其器

籌謀豈成功

天恩更殊渥

蹇々懷匪躬

思我亦何時

叩頭問蒼穹

曾て客あり、一葉の書を携へて、翁に賛を請ふ。画は、骸骨懇親會なるべし。十余の骸骨、荒野に集まりて、盛宴を張り、躍る者あり、彈ずるものあり、食ふものあり、飲む者あり。翁、展覽一過、直ちに筆を執り、

傲骨、媚骨、佞骨、總是爲枯骨。

と書して客に與ふ。

上野廣小路の割烹店松源、新に一樓を築く。翁、維新當時の縁故により、一篇の長歌を詠じて之を賀す。歌に曰はく、

咲きに布ふ上野の花は 朝夕に見れども厭かき 葉櫻に袂涼しき 忍ばせの池の蓮の 蔭清き露の白玉 ちどもなく霜とぞかはる 年の矢のはやまの眞弓 色づきて隙行く駒の 足搔ささへかくちありける いつしか今朝白妙に 大江戸の太路の塵も 雪積みて立たずやあらむ 寒風にとる盃の めぐるまに眺免も酔い

もいやましぬ常盤の松の 源とたゝふる此處の 高どのは千代に八千代と ことちぎて老いも若きも はや酔ひにけり

いにし戊辰の春、我敵味方の亂射に逢うて、しばし此の家に入りし事もありき。家あるじの婦は、ふるさ知る人になむ。このせちがらき世よ、家の風ふき起しぬるは、丈夫もれさく及ばざるの働きものといはむも、空譽にはあらずかし。

新島

故新島襄氏、曾て翁を訪ひ、謀るに、私立大學設立の事を以てす。翁、例に依り莞爾として曰はく、宗教を弘布するは難し。足下が銳意、事に之に従ふの苦みは、余固より之を諒とせり。而かも私立大學の設立に至りては、事、更に一層の難を加ふ。余、竊に足下の成功を危まざるを得ずと。新島氏、色をばす、忽々辭して去る。その後、一兩年を経て、氏は再び翁を訪ひ、謝して曰はく、曩に先生の苦言を聞き、先生の志固より小生を戒むるにあるを知るも、而かもなほ、意に介然たらざるを得ざりき。今や黽勉の効顯はれて、事業の基礎、漸く定るに當り、顧みて往事を思へば、先生

の訓誡が、小生を奮激せしめたるの力、また與りて少しとせず。小生、茲に謹んで先生に謝すと。翁乃ち曰はく、事業の基礎、定まれりといふと雖、未だ僅に多少の醜損ありしに過ぎず。事、これより更に難からんと。よつて諄々としてその將來を戒む。氏、いよゝゝ翁の厚情に感じ、爾來屢々翁の門に出入して、その高説を聞く。然るに惜むべし、新嶋氏は、明治二十三年の春に至りて、事いまだ成らざるに、既に黄泉の客となる。翁、その訃に接して、俯仰感慨に堪へず。氏が宿望の成否は、一に懸つて、その後を承けたる金森通倫、小崎弘道、徳富猪一郎、三氏の上にあるとなし、直ちに書を三氏に贈りていふ。

新島氏遠行之旨爲御知被遣驚入候。兼而師之思慮度に過ぎ、事業盛大を期するに急なるは乍不及御忠告申述候處、此の訃音に接し遺憾に不堪候。今日行掛りの大業、跡々を踏躋候は不可言六ヶ敷ものに候間、諸君御深慮有之、百難重り到候事と御覺悟專一に存候。小拙是迄難危之衝に當り、唯々一誠字不撓之心得に而、内外我が負擔するもの悉く矛盾と心得居、漸く廿餘年を経過し、猶如一日の思を成

申候次第、後善之策も甚だ六ヶ敷、案外之事も生し候もの、右亡師之爲且諸君へ老朽之一言無服藏申述候。御聞流可被下候以上。

翁、曾て城南千束村に幽地を購ひ、小亭を構へて別墅とし。名づけて洗足軒といふ。戊辰の役、官軍東下して池上本門寺に陣す。翁、幕命を奉して、屢々この處に行き、道、常に千束村を経過す。洗足軒は、その紀念の爲に建てたるなり。楓樹數株あり。

翁の歌にいふ、

うゑおかばよしや人こそ訪はずとも

秋はにしきを織りいたすらむ

染めいづる此の山かけの紅葉は

残す心のにしきとも見よ

翁、壁間に、曾我蕭白の筆に成る『裸馬細流に飲む』の畫を掲ぐ。自から之に賛して曰はく、

老騏歎晚節。

何況驚之豈。

豈能堪重任。

歩々唯蹉跎。

瘦骨數箭癩。

艱危幾汗血。

逡巡九衢塵。

御者笑跛蹙。

郊村道平坦。

涓々野水冽。

雖無春草肥。

亦足以小啜。

長嘶向蒼穹。

誰知千里傑。

蓋し諷する所ある也。

翁、曾て病み臥して起居に便ならせ。人あり一日翁に見ゆ。翁曰はく、足下の來る、

豈に彼の揮毫の督促にあらざるをを得んや。余、今、足下の爲に臥筆を試みるべ

しと。依つて婢をして絹地の兩端を引かしめ、大筆を把りて仰臥のまゝ、『松風彈琴』

の四大字を書と。墨痕淋漓、例に依りて例の如く、毫も臥筆に似せ。

某夏、客、翁を訪ふ。翁曰はく、今日暑氣殊よ甚し。請ふ足下に此品を呈せんと、

傍なる一本の團扇を取りて客に贈る。表にて、淡墨の蓮を畫き、裏には

咲きいづる池の蓮の花は誰が

心をのぞくうてななるらむ

と賛せり。蓋し翁の自畫自賛あり。

また曾て桐葉二三、地上に散亂せる上に、一匹きの蝸牛、角を怒らせる所を畫き、其

の上に賛して曰はく、

かたつひりたのもしげなき角ぞどは

知らであらそら桐の葉の上

明治廿三年、名古屋地方において陸海軍大演習あり。翁も昔しは陸軍海軍に總裁とし

て、維新の前後に軍政を司りし身の、自からその地に臨まざるも、胸裡に方略を畫

して、獨り樂む所ありしが、左の歌を詠じて、或る人に示せり。

陸軍

鳴る神の野にも山にもとどろくは

今た、かひの最中なるらむ

敵味方入りかみだれつ、劍振り

ひくな進めど雄たけびをして

駒の鼻いざ引きむけてかけたてむ

色めきとめし山蔭の敵

木の葉捲くつむじの如くかけたつる

駒のひづめは龍にもやあらむ

勝得ては備みだすな銃とりて

御旗の下にこれや武士

山岸も崩るばかりの雄たけびに

かへりみもせぬ御旗守かな

大君の御前なりやと言わげて

まじろきもせぬ武士やたれ

砂烟けたて、進む一とくみは

これや新手の備なるらむ

雁のつらに備へをたて、おりしくは

此處の芝居をしむるなるらむ

海軍

あやしくも白浪たちぬ水底に

備へやあらむ心してよれ

一づらに船うちひけてうち出せ

むかひの丘は敵の通ひ路

ありそ浪船よそひしてうちよせよ

向ひの岸は守りだになし

あまのやのたすまひこそ常ならね

火矢うち入れよ伏のありやと

雨風のはげしき折は心せよ

夜討やあらむをこたふるなゆめ

敵の船ま近く寄らば丸こめて

真楯のあたりにうちも破らむ

同じ歳の秋、土耳其軍艦ノルマントン號、我が紀州沖に沈没す。翁、之を傷み左の一絶を賦す。

狂濤汽船厄

慘憺南紀洋

黒雲掩初月

悲號沒蒼茫

第一期議會の開かるゝや、諸事、是より先き世人の期待せし所に合はざるもの多し。

翁、乃ち歌うて曰く、

撰み出しそぐれをのこ等行末は

このみある世となしやしぬらむ

かげつらふとわりかれ世の中は

そをだに待たで下り行くかあ

國の爲ますらをのこのより集ふ

むしろはかくやあはれ世の中

かげつらふその言草はしげれど

駒もそさめすなりやしぬらむ

また世人の失望を慰藉していふ

その中に玉もやあらむ砕け行く

瓦のみがど我かかまはじ

あなういと思ひな捨てそ赤くして

角ある牛は神もそてどを

移り行く駒の足搔きのはやけれど

あふもふもはり手綱ゆるめな

明治二十四年、華族尾張、高松兩家の離縁事件あり。延いて徳川家一門の平和を破らんとせるの勢あり。翁、乃ち出で、之を調停す。事、漸くにして平かなるを得たり。翁、當時左の一文を人に示す。曰く、

一日舊友來り訪ふ。一笑していふ、君、今、歳既に七十、猶も書を讀んで他に出席でせ。故に心盲せる此に至る。是れ恕すべし。偶々聞く、尾、高、兩家紛々たる議、君、その間に入りて空奔まど。何ぞ愚の甚しきや。兩家の舊藩士、君が愚を

察し、敬して事を托す。其の實は、君を翫弄して、後舉を施さんとするの策あり。是れ明に見易き義なり。然るを詳察せず、朝野唾棄するの天倫及び道理を説きて喋々す。其の陋、笑ふに堪へたり。爾、斯の如き説を爲し、又た世間に交る勿れ。假令文明を假裝するも、誰か其の愚を笑はざらむやと。余、半睡初めて覺め、愧汗背よ溢る。千悔及ばず、負け膽を張り、掌拍して共に大笑と。曾是れ半夢中の談、野馬枯草を噛みて、牛枕に囂々。

明治二十四年、清國の大儒俞越氏、古稱の賀に當る。翁乃ち自著『海軍歴史』及び『忘友録』に左の和歌を添へて之を贈る。

曲園老師の七十の賀によみて奉る

物部安芳

高き名は四方にひらき安らけく

七十路をさへ越ゆる君かな

奉賀曲園大史

芳名播宇宙

壽福是天祐

(右讀意)

安●倍●井●磐●根●氏、曾て衆議院議長星亨氏の信任問題を提出す。當時の新聞、日々この事につきて記せざるなし。翁、乃ち左の一首を安倍井氏に贈る。

山かつと云ひなくなれしを老いぬれど

安倍井の翁心をしき

安●倍●井●氏●の●返●歌●に●曰●は●く、

山かつの綾なき袖のうれしさは

言葉の露のかゝるなりけり

明治廿七年の春、男爵辻維岳氏物故す。翁、追悼の情に堪へず、和歌一首を書翰に添へて、その遺族に贈る。曰はく。

維岳殿御逝去之旨爲御知被遣既昨年御來訪にて今昔の御物語我君と御同年大に老たり杯戲言いたし人生之難願今更と不堪感情候志を述て御靈前へ備候可然御取計被下度小拙今に臥病中御宗屬方へも御悔希候也

一月五日

安 芳

維岳氏の靈前に備ふ

全^いじ^い年^いどもに老いしと語りしも

今^いは^い一^い夜^いの^い夢^いど^いな^いり^いけ^いり

往年、朝鮮に東學黨の變あり。翁、感慨のあまり、左の數首を詠ず。

東學黨に代りてよめる

わ^が屍^が草^はは^びす^とも^いた^づら^に

管^{シモ}杖^トの^下に^豈に^死あ^めや^も

磨^げし^管杖^のも^とに^こへ^じと^や

草^葉の^末を^赤く^染ひ^らん

諸^人の^涙つ^きな^ばも^ろ人^の

國^の大^臣の^血を^やす^いら^ん

天^によ^び地^に叫^びつ^い今^はど^て

ひ^らめ^く劍^誰に^加へ^ん

心^いして^水棹^さして^よ風^ある^い

あ^りな^れ河^にた^てる^あだ^浪

水^や空^くぬ^ちも^わか^ぬ北^の海^に

羽^をの^す鳥^の何^あさ^らん^(重出)

人あり、翁に樞密顧問官故元田永孚氏の人と爲りを問ふ。翁、筐底を探りて、左の一
文を出だし示す。蓋し元田氏が、曾て翁に贈りし『和年老逢春吟』の後に、翁、自か
ら認めたるものなり。

我未識先生。而耳其名者久矣。今歲始獲接先生。外人嘗評先生曰。正實溫厚之人也。
我謂固也。然其言似未盡。先生忠愛具非常之天質。其言一行莫不悉生干忠愛之
餘。豈外人能所揣測哉。故對之不覺敬服。其言外透徹于我心肝者猶明星之輝々于
天。嗚呼。我接遇先生。得瀉膽抉腸以乞其教。何幸過之。又讀先生之詩文。我雖不
學。言外之感觸。儻然不能自止。故不憚不文。一言于其後。

明治二十一年晚秋

海舟 勝 安 芳

また元田氏の訃に接して、翁の詠める歌

天の空つらをはゑられてゆく尸の

友はあしべに音をのみぎなく

明治二十七八年の役、至尊親征、膺懲の功、未だ半ならずして、軍國の棟梁故有栖川宮殿下の薨去に遭ふ。翁、ときに孟蛇の厄あり、感慨の情にたへき。一首のうたに赤誠を吐露して曰はく、

故有栖川宮殿下御國葬の折、臥床にありて遙に追想し奉る。

物部安芳

音羽なる豊島が岡に君をおきて

かへらん道もなき夕かゝ

古のはかなきあどを夢あらで

現に見つる今日にもあるかな

其のとき、座にありし客よ向て、余の微衷は他人の知る所に非ず。これを知るもの

は、即ち余一人のみとて、更みまた一首を示す。

厚氷むすばいむすべかたしども

くだくに、かたき事はあらしな

同じ年の役に、舍雪將軍のまさふ帝京を發せんとするや、翁の贈るに國風三章を以てせり。意氣昂然、真に征清行の餞に適するもの。

山縣將軍を送る

いさましき軍たちかあまつろはぬ

かたきを解きてはや歸りませ

ほことりてますら武夫らわたるらん

ありなれ河の浪たかくとも

さいで行くわあ日のみ旗朝風に

雲ふきはふ高麗のしら山

遼東の地、冬に至れば五寒喩ふべらき。翁、征清の師を想むて歌ひけらく

あつふそま重ねし人は知らざらめ

なごに剣に霜こなる夜は

情至りて、而して世を諷するの趣、翁ならずして誰かよの吟腸を有するものぞ。

遼東還附の當時、世論囂々たり。翁、心に感走る所あり、

世上都兒戯

閉門唯默思

濛々六合裡

大義有誰知

の一首を獲、よりて、その句をとりて自から濛六山人と號し、筆のすさびに三國一の名山を書き、自賛して曰はく

世上三國云々と云ひて、憤る者、愁ふる者、泣く者あり。我れ甚だ感ふ。

三國にふんばたがれとふじの山

濛六山人

北白河宮殿下の薨じたまふや、翁は病床ながらよ、哀悼の意を表する爲め、左の歌を

詠ぜり

北白河宮のかくれさせ給ひし時

安芳

いとも惜しいともはかなし吹さすさむ

常なき風のいともうらめし

またみいさを思ふ

白鳥の御神につぎしいさをい

いくさの君にけふ見つる哉

容あり、翁に向つて英雄の末路と藩閥政府の末路とを對論す。翁曰はく、暫く之を措

け、余に歌あり、足下に示さんとして口吟すらく

位山登りつめたるその未は

樞密院の院主あかりけり

穿ち得て妙といふべし。

先年、翁、頑癪の爲に苦む、時に一政客あり、刺を通じて謁を求む。翁、病の故を以て之を謝す。客、聽かずして曰はく、國家の一大事なり。翁、止むを得ず之を病室に引く。客、滔々として説いて曰はく、今や議會は内閣と衝突し、立法行政、ともに機關の圓滑を欠く。我輩、坐視するに忍びを、茲に憂國の志士相謀りて一黨を組織

し、以て立法部と行政部との調停を勉むるを初めとし、その他、大に國事に奔走せんと欲す。而かも之を總裁せるの人なきに苦む。閣下、もし憂國の志あらば、請ふ我輩の爲に、一臂の力を貸せど。翁、從容として答へていはく、余は、謹んで之を辭す。蓋し余は、當今の時事、未だ國家の大事と號叫するに足らざるを見るなり。新紙、報ずる所の政黨の離合、大臣の動搖、必竟、國家よれいて何かあらん。且つ政黨員の、余が門に出入するものも頗る多し。而かも彼等皆温順なり。暴舉以て國安を害するが如きと、彼等において決してあるべからず。要するに、世上無事の人あり、消閑の策としてかくの如く呶々するのみ。若し眞に國家安危に關するの大事あらば、余、老いたりと雖、豈、敢へて犬馬の勞を吝まんや。然りと雖、世間無事の人と伍を爲して、奔走に疲るゝが如きは、余の欲せざる所。これは支那より到來の煎餅なり。足下乞ふ一片を味へど。いひ終りて、臂を伸ばして搔く音嘈々たり。政客獨語して曰はく、横着なる哉この翁と。乃ち忽々辭し去る

無絃琴

明治廿二年夏のころより何となう雨がちにて、大空のさま人ごゝると同じく鬱々としてしめり勝なるに、とつ國の約あらた免られむとて、その議とれる人々のあげつらふ筋ども、たがへり、否しからずとて、とあばかまびをしく、我もまた身の拙を忘れ、よしなしとせも考へしるし、乙夜の御覽を経しもの數くゝに及び、また國のおとゝのもとへしるし送るなど、心ばかりの誠を以てなせし事どもあり。其折からむかし今の感にたへせ、讀出でしえせ歌をこばくかいやり捨てむと思ひしふ、さな成せそとといひる人の言葉にまかせ、ひと巻につゞり後のかたみとなほに南無。

物部安芳

て、あ、れ、つ、る、玉、の、小、琴、の、緒、を、た、い、ひ、
ふ、り、し、い、ら、へ、は、き、く、人、も、な、し

こは、はたとせあまりさきつ年によめるなり。いまむかしの感に堪へず、思ひ出しまいに。

おもひ川思ふおもひのあさければ

おなじ流れをたづねて、かゆく

寝くたれし朝居の髪のみすぼれて

つげの小櫛のとくひともし

かりそめにむすびし水とおもひしに

とくかたもなく氷るにけり

浮雲は晴れみはれせみさだめなみ

ればつかあしやゆく末の空

いたづらにうきにせしなば眞清水の

すましくむ人のいかにうからむ

世のさまは、う、く、と、あ、り、け、い、が、栗、の

おのれとゑみて落る此のころ

神代よりいまに傳ふる民ぐさず

いゝに利鎌のかくはするとき

なともなくつひに晴れなむも、つたふ

おやうち山にたてるうきくも

あらぬかたになびきそめけりしのすゝき

風こそしのにみだすなるらめ

世々を経て御代の恵を思ひ出で

おひにし賤の身をわをれつゝ

とまりそる大江のもとにかせわれて

たななし小舟見る目あやうし

浪風のあらぬか崎のむらしぐれ

さして頼まむ蔭だにもなし

むら時雨いたくな降りそ笠をなみ

かくては朽ちむ老がたもとも

むら時雨ぬるゝたもとをうちかへし

朽つるばかりをねもひ出よせむ

いや生ひにあひしげれどもよきふの

かるゝ布どなきけふのあさしも

君が爲め世のためつくまことあらば

ねどゝはかくや思ひもだれむ

いにしへにかはらじものをおのかしゝ

心くたるとしる人もなし

梅のひと枝

花の色清きに其香のかぐはしき、またたぐひあらじ。これに打ち向ひて、心のよしなきと言ひ出るをかくあはれに覺ゆる。花やもし靈あらば、人の世のおるかしきいかでうくと笑ひあむ。是れをおもへば、いとく耻かしくこ

安芳

そ。

かれ果てし昔の庭にすむ月を

獨りどもとやかをる梅が香

人の世のくだるにそまで雪のうちに

咲きいてそめし梅のはつ花

月のみそ夜なくそめる梅の花

あはれむかしのやどはあれしを

月すみて梅かほる夜は大江戸の

おる路の塵もさゝずやあるらむ

かくはしき名をとむべき人は誰ぞ

花はむかしの香ににるへとも

時そとて咲きいてそめし梅の花

くたりゆく世のすかたあらじな

植ゑそめしあるしは誰そやいにしへを

忍ぶたもとよ梅かをるなり
住みすてふりにしあを来て見れば

軒端の梅は春を忘れぬ
あなかちにいとふにあらて塵もなし

清くもかをる梅のはつ花
時くれは雪の中にも咲きいて

かをれる花を誰れにたとへむ
世の塵も清きにそみて跡もなし

ゆたかにかをる園の梅か香
時そとておどろの中にさく梅の

清きは人のこゝろにも似そ
夜る光るたまにたとへむ梅の花

あやあき闇も香やはかくる

人の世のゑはつかなきに似ざりけり

野すゑのうめの雪にかをれる

うめさきて三日四日たちぬいさやけふ

行きて尋ねん雨にぬるとも

まどら雄のかさしにせやうめの花

雪の中にもさきてかをれる

うち寐ぬるゆふへの夢もかをるらむ

まやの軒端にはふ梅か香

さきいつる我か卿のやの梅の花

ちりにけかれし面影もなし

櫻花の吟

思ひなく花見る折はひといせの

安 芳

咲きいでし雲の上野の山さくら

樂しどおもふ日數あるらむ

宵の雨の晴れし朝けののどけさに

むかしの憂をおもひこそそれ

山さくら花にたどへしまほら雄の

不ころびそめし山櫻かな

櫻さく日數のふとは雨風も

すゑは薪となりてはてなむ

人知らぬ心の中のわひまさも

こゝろあれやとおもひこそそれ

いたつらに咲きて散らむ山さくら

花のもとには消えやしぬらむ

都にはちぬいふ香るれとを

いつの間にのこれる雪は消えぬらむ

けさより櫻咲きいてにけり

咲くを待つる日の日數はなかけれど

はやちりをむる山さくらかあ

天さかるひなに咲けどもやまさくら

雲井をおあし色香なりけり

おもひきやかくなからへて今どしまた

忍ふの岡の花をみむとは

* * * * *

虎となり鼠とありて老よけり

海舟

海舟先生 氷川清話 終

明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行
 明治三十三年十一月二十九日發行

定價金參拾錢

東京市牛込區築土前町三十番地
 著作兼 發行者 吉 本
 東京市日本橋區上槇町十六番地
 印刷者 平 島



東京市牛込區築土前町三十番地
 發行所 鐵 華 書 院
 東京市日本橋區上槇町十六番地
 印刷所 八重洲橋活版所



版權所有

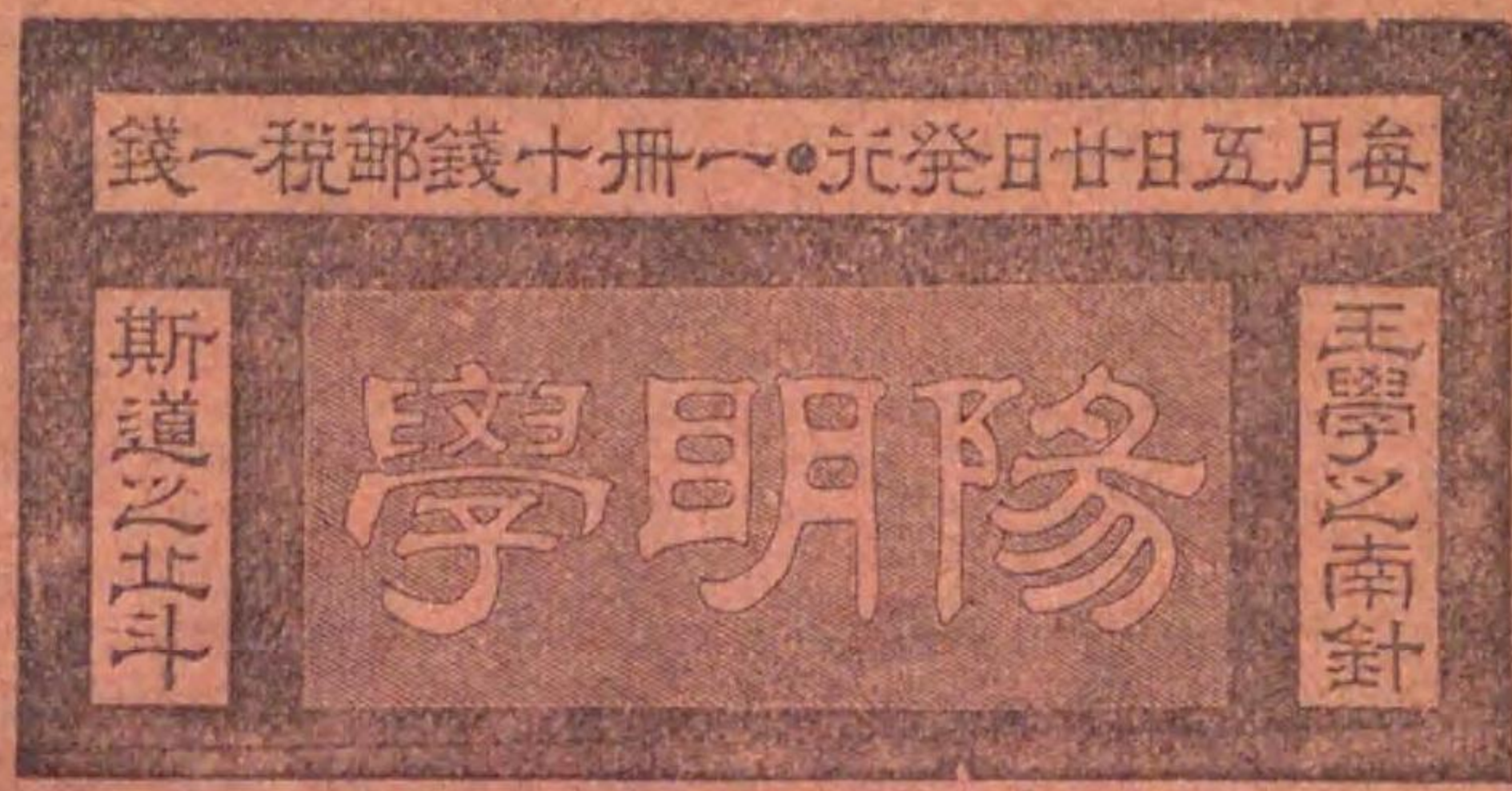
子爵 渡邊國武 題
 文學博士 井上哲次郎 著
 文學士 高瀬武次郎 著

日本之陽明學

定價金五十錢
 郵税金六錢

新建侯陽明王先生は、文武兼備の豪傑にして、時處位の至善に達し、知行合一を以て標的と爲し、簡易直截を以て主眼と爲す。加之、凜乎たる一種の生氣を帯び、最も心術涵養に力あり。是を以て遂に精神の修養と、品性陶冶とを以て、陽明學特得の長所と爲すに至れり。更に之に加味するに、我國民固有の實踐的性質と、嚴霜烈日の如き大和魂を以てしたる者、是れ即ち所謂日本之陽明學にあらずや。近江聖人の德行、熊澤蕃山の經綸より、維新諸豪傑の天空海濶の氣象、震天動地の偉業に至るまで、皆な陽明學の賜ならざるはなし。本書は専ら史的研究法に従ひ、序論に於て陽明學全系統の梗概と、彼我王學者の異點とを叙し、本論に於て我國に於ける陽明學を詳述す。期する所は、王學の齟齬を解き、青年の心術を涵養するに在り。

定價
六冊五十七錢
十二冊一圓十錢
廿四冊二圓五錢



郵稅
每冊一錢、見
本一錢郵券
十一葉

文弱氣死の社會に於て、英靈活潑の氣を吐き、精神的修養の必要を喝破する者は『陽明學』に非ずや。

『陽明學』は、號を積むと既に六十。而も初號よりの申込續々絶えざるを以

て、今般 **増補改訂** の上、更に第壹號より順次發刊せんとす。其の講義評釋(完結後各二冊手に綴成する)

得の重なるものは如左。

- 古本大學講義……………山田方谷
- 傳習錄講義……………宮内鹿川
- 王學一斑……………山田濟齋
- 王文評釋……………土屋鳳洲
- 王陽明出身靖亂錄……………田中從吾軒
- 周易進講手記……………三輪執齋

若し夫れ院説は、犀利凱切時弊を刺し、其の學園、史傳、閑窓、文林の諸欄は、豊富精詳光燄を發し、雜纂及寄書欄は、益々出で、愈々妙に、讀者の望みに副へんと欲す。幸に愛讀を賜へ。

改版第一號第二號第三號以下順次發行

『東經濟雜誌』評陽明學が英雄豪傑を製造するか、英雄豪傑が陽明學を好むか、其何れなるを知らずと雖も、兎に角我が國にては、

英雄豪傑の士に陽明學者尠からず、此『陽明學』は、王學を發揮して世人の精神修養に資せんとを期したるもの也。欄を陽明學、學園、講壇、史傳、文林、雜纂、寄書、附録(講義評釋)の八欄に『日本』評禪學流行の聲やひで今や陽明學は生れ出で

分ち有益の文字多し。『都新聞』評明代の傑

に於て最も要せらるゝなり、玉石同架生は之を歡迎す。『都新聞』評明代の傑又曰く、明快の文字、之を開けば胸神頓に爽快を覺ゆ。『都新聞』評明代の傑才高く學深く大道に於て憬然悟る所ありて知行合一の説を唱道して天下を風靡す其の學者を陶冶すると夫の性理に拘々として勃理窟を爲すが如き比にあらず是を以て我が國に在りても王氏の學を修めしものに奇異絶特の士を出し、は皆人の知る所ならん

鐵華書院嚮者此の學を振起せんと欲して『陽明學』と題せる雜誌を發行せしが製本の軀讀者の利便を缺くものありとして今回増補改訂を加へ更に其の第一號を發行せり載する所皆王氏の精華にあらざるはなれば學者の才を養ふに於て其の益する所蓋し尠少ならず。『萬朝報』評從來發刊し來りし『陽明學』の体裁を變更し講壇には三輪執齋の四言教講義あり其外史傳、文林、雜纂等あれども本號の神髓は寧ろ附録に存す就中山田方谷の古本大學講義、三輪執齋の周易手記の如きは後生の薰沐して誦讀すべきものなり執齋の手記緒言の如きは坐るに其人を二百歳の上に想はしむる者あるなり

10837

氷川清話

(定價郵稅共正編に同じ)

第六版
續

編

谷干城子題詞。富田鐵之助君贊辭
勝伯壯年時代の肖像挿入

第四版
續々
編

近衛篤磨公題辭。東久世通禧伯題歌
氷川邸内外の眞圖挿入

